

## 第3節 集落の生業と文化

### (1) 青苧づくりの景観

江戸時代以来、大江町の農村集落の暮らしを支えてきた商品作物の第一に青苧があげられる。それは、嘉永6年（1853）左沢代官所に提出された大泉次郎右衛門家の文書に「産物第一之青苧」という記述があることから裏付けられる（『大江町史』）。

ところで、村山地方では「月山の見えるところには紅花を、見えないところには青苧を植えよ」との言葉が伝承されてきた。確かに、紅花は月山が見える内陸の平野部に栽培されてきたのに対して、青苧は平地の少ない山間部の村々に栽培され山際に傾斜する狭い土地が耕地として利用されている。そこは水田率が低く畑地として集約的に作物栽培が行なわれた所でもある。そういった地形は小盆地をなすために風の勢いは比較的弱く風が当たると品質低下を招く青苧にとっては好条件となる。上州や南会津、羽州内陸部など東日本の良質青苧栽培地にほぼ共通するのは、いずれもそのような地形・地理的状况におかれた場所である。その他の条件として良く肥えた土壌が必要とされるのはいうまでもない。およそ地味の肥えた傾斜地が適していたといえる。以上のことは、広大な平野部をもちかつ海風が吹き付ける庄内地方では、青苧は背が伸びず良く生長しないという実態からもよく理解できる。

このことから、大江町の山間の農村一帯は青苧にとって良好な地理的環境だったといえる。とりわけ大江町の旧七軒村地域は、「七軒苧」といわれるほど良質の青苧を産した。このことについては、かつて松程の青苧問屋阿部清吉家の番頭役だったという白田佐助氏の「青苧問屋の勤め」と題する次の文章からも認められる（『歴史の証言』）。

新潟の小千谷と石川県の能登地方は、どちらも高級織物の産地。繊維原料の青苧の大部分は山形産の物でした。最上青苧の中でも上場（良質物）の産地は、七軒・立木・中山・栃窪に限られ、なかでも七軒苧が珍重されました。

このように七軒苧が絶賛されたことがわかるが、その中心地が七夕畑集落であったこともまた広く知られているところである。したがって「七夕畑苧」ともいわれた。

以上のような実態を踏まえれば、江戸時代から主に明治30年代後半まで、月布川を挟んで南北に広がって山野にまで食い込んだ畑地では、大量に栽培された青苧がたくましく生育する景観を目にすることができたと察せられる。青苧はこのように当地域の暮らしをうるおした重要な商品作物の筆頭にあげられ、人々がつくりあげた青苧畑の景観は生活・生業上の特性として位置づけられる。

なお、青苧は明治30年代後半から目立って小千谷や北陸方面からの需要が減少していく。その頃には山形県では絹織物の原料となる養蚕が奨励されており、次第に青苧畑には養蚕用の桑を植えることが多くなる。大正時代に入ると農村の景観は青苧畑から急激に桑畑の景観に転換されていったのである（表6-1）。

表6-1 青芋各郡作付段別推移（「青芋の生活文化史」菊地 和博より引用）

	南村山	東村山	西村山	北村山	最上	飽海	東田川	西田川	西置賜	東置賜	南置賜	合計
明治 25年	13.9	25.6	207.2	108.8	10.1	11.8	4.2	1.2	47.2	37.4	2.6	470.0
26年	12.0	25.4	193.1	124.1	10.0	9.1	5.4	—	30.8	37.5	2.9	450.3
27年	11.5	25.7	224.4	125.8	23.5	7.6	13.9	—	41.6	32.9	3.9	510.4
28年	10.2	29.8	223.3	97.6	27.9	7.6	4.8	—	23.1	39.0	3.4	466.7
29年	9.9	15.2	222.5	107.6	27.4	9.9	6.2	—	42.9	42.2	3.9	487.7
30年	8.9	12.1	220.8	87.9	28.0	7.9	9.3	—	43.0	41.5	3.9	463.3
31年	8.9	11.0	201.9	96.0	36.0	8.2	9.8	—	29.9	32.3	2.3	436.3
32年	16.9	10.0	116.5	55.3	27.8	19.1	9.8	—	41.7	33.9	8.1	339.1
33年	12.1	10.0	102.3	76.5	49.7	18.2	10.0	—	34.7	36.8	8.1	358.4
34年	5.0	10.9	102.4	49.5	51.2	12.5	9.0	—	29.9	31.3	11.1	311.5
35年	12.1	7.5	107.4	49.1	43.3	7.1	8.0	—	29.9	33.1	11.1	308.6
36年	11.8	8.0	88.0	55.6	48.6	6.5	7.5	—	28.7	32.2	9.8	296.7
37年												297.1
38年												228.5
39年	6.8	7.2	65.8	38.7	50.5	2.7	15.2	1.4	11.4	14.3	6.6	220.6
40年	6.8	7.0	44.7	39.7	41.8	3.1	5.5	1.9	20.6	12.2	5.4	188.7
41年												165.2
42年												153.0
43年	5.5	4.5	35.7	36.0	26.1	1.7	5.2	0.4	12.0	7.8	1.1	136.0
44年	4.5	3.4	59.6	35.2	25.5	2.0	0.3	0.4	11.4	5.5	1.0	148.8
大正 元年	2.5	3.4	47.1	27.0	20.4	2.3	0.2	—	8.1	5.3	0.8	118.5
2年	2.5	2.9	48.9	22.2	15.1	0.2	0.2	—	8.1	5.3	0.8	106.2
3年												103.8
4年	1.9	2.0	41.7	22.7	12.7	—	0.2	—	7.7	3.9	0.6	93.4
5年	1.8	2.5	37.7	23.1	17.2	—	0.2	—	9.5	4.1	0.5	96.6
6年	1.5	2.3	32.8	28.0	9.8	0.5	0.2	—	8.1	3.2	0.5	86.9
7年	1.4	2.3	38.1	17.6	9.7	—	0.2	—	7.7	3.1	0.5	80.6
8年	1.2	1.9	28.7	12.8	9.7	—	0.2	—	9.2	1.9	0.5	66.1
9年	—	1.9	21.7	14.9	8.9	—	—	—	7.4	1.5	0.4	56.7
10年												53.1
11年	0.5	—	16.9	10.5	8.8	—	—	—	6.9	0.4	0.4	44.4
12年	0.5	1.2	13.0	7.1	6.6	—	—	—	6.9	0.4	0.2	35.9
13年												
14年	0.5	—	4.1	5.1	5.8	—	—	1.0	6.0	0.2	—	22.7
昭和 元年	0.5	—	4.1	5.1	5.8	—	—	1.0	6.0	0.2	—	33.1
2年	0.5	0.5	5.8	5.5	5.8	—	—	—	—	—	0.1	18.2
3年	0.5	—	33.0	3.7	5.6	—	—	—	0.8	—	0.1	43.7
4年	0.5	0.3	5.2	5.9	6.0	—	—	—	1.3	—	0.1	19.3
5年	0.5	0.3	4.2	6.1	5.7	—	—	—	0.9	—	—	17.7
6年	0.6	—	4.2	7.2	5.5	—	—	—	0.8	—	—	18.3
7年	0.7	0.3	3.7	7.4	7.1	—	—	—	1.5	—	—	20.6
8年	0.6	0.2	3.8	7.4	7.4	—	0.1	—	1.1	—	—	20.6
9年	0.6	0.2	4.0	7.3	7.7	—	0.3	—	1.0	0.2	—	21.3
10年	0.6	1.2	4.2	8.3	7.8	—	0.7	—	—	0.7	0.2	23.7
11年	0.6	2.5	4.3	7.1	7.1	—	0.6	—	0.7	0.2	—	23.1
12年	0.6	3.7	3.6	2.1	7.3	—	0.3	—	0.7	0.3	—	18.6
13年												
14年												
15年												
16年												
17年												
18年												
19年												
20年												
21年												
22年												
23年												
24年	0.1	0.3	0.8	0.9	1.1	—	0.7	0.2	—	—	—	4.1

単位は町。空欄および昭和24年以降は統計なし。

## (2) 地区毎の生活と生業

ここでは、文献記録やいくつかの聞き書き調査を踏まえて、大江町の七軒地区、柳川地区や中ノ畑地区から葛沢地区などの農山村にわたり青苧と養蚕を主とした生業と暮らしを歴史的に再構成してみる。これらの農山村の暮らしが、左沢あるいは寒河江など他地域と経済的・文化的にどのような関わりをもって成り立ってきたのかという観点をもって検討を進め、最後に整理・まとめを行った。

### ① 七軒地区全体

明治22年に、貫見、小清、勝生、小柳、黒森、沢口、柳川が合併して七軒村が成立した。さらに昭和29年に七軒村と本郷村が合併して漆川村となり、その後、昭和34年に至って左沢町と漆川村が合併して現在の大江町が成立している。

七軒はすでに記したように良質の青苧「七軒苧」が生産された地域である。『大江町の語り部』の中に記された「七軒村の暮らしとむかさり道中」によって七軒地区の経済生活を振り返ってみよう。

明治時代までの七軒地区の人々は、まず藍染めに欠かせない灰の生産をした。良質の灰ができる深山のブナの木を原料として灰を生産した。つぎに、青苧は漁網の材料としても売り捌かれた。明治に入ってから青苧栽培は盛んであったが、後半になると養蚕業も盛んになり青苧畑は桑畑に切り替えられ、これが七軒の山の奥へ奥へと進んで行った。昭和3年頃までは華やかな養蚕の時代といえる。昭和初期から製炭業も盛んとなり、七軒村の木炭は左沢方面の人々の生活に必要な燃料となった。反対に本郷・左沢産の米が七軒村へと運ばれていた。第二次世界大戦後はすべての物が化学製品にとって代わり蚕糸業も木炭燃料も終わりを告げた（『大江町の語り部』）。

上記にあるように「藍染めに欠かせない灰」とは、媒染剤として使用された「木灰」のことである。灰焼きはブナや雑木を井型に組み上げて焼いたが、その下に残る灰の固まりが利用価値が高かった。藍染めをする際に染料を繊維に固着させるため木灰が最適だったのである。大正の初め頃まで灰を焼いており、今でも七軒地区の所々に灰焼の痕跡が残っているという。木灰は左沢の間屋に売り渡され谷地・長崎・山形方面に行った（『七軒東の郷土史』）。

### ② 集落毎の生活と生業

#### ア 柳川

2009年9月2日、今野まさよ氏（大正11年4月生まれ、87歳）、富樫きよえ氏（大正8年生まれ、90歳）、庄司武氏（昭和11年生まれ、73歳）から聞き書きした内容を盛り込んでいる。

#### 集落と青苧

柳川の集落は月布川上流にあり、北西から徳沢川とくさわがわが合流して氾濫原と河岸段丘を形成する場所に形成されている。標高250m前後に位置しており、七夕畑なつたけや長畑ながはたけなどかつては8つの支村からなっていた。江戸時代は青柳あおやぎと称していたが、明治6年2月に現在の柳川と改称している。

七夕畑はとりわけ良質青苧の産地であり、「七夕畑苧」として絶賛されていた地域として知られる。青苧の栽培は地味の肥えた傾斜地が適しており、七夕畑から月布川対岸の「向」むかいにかけて植えられていた。

北の湯ノ沢山から月布川沿いにある七夕畑の集落まで南向きの斜面が広がっていること、土地が肥えている

こと、地滑り地形であること、などが良質青苧が生産される条件とされる。春早く青苧畑を焼いて二番苧を育てる。二番苧は白くて質がよく成長が揃っている。8月末から9月初めにかけて咲いた花が落ちる頃刈り取る。普通は1戸で2～3畝歩に青苧を植えたが、多い人はその十倍くらいの面積に栽培したという。明治中期に柳川全域で青苧生産は220貫目であった（『大江町史 地誌編』）。

青苧の繊維は糸にして帷子、紋付袴、サルバカマ（サツパカマ）など自家製衣料の原料として利用した。労働着としてのサルバカマは水切りが良く雪をはじくので好まれた。そのほか糸は蚊帳、下駄の緒、ハケゴ、ミノの材料としても使用した。剥いだ皮の残りものはスタワジ（竹製用具）の上ののせて叩いて綿状に仕上げ、それを布団に入れて綿の代用とした。青苧の皮を剥ぎ取って残った茎は、捨てることなく乾燥させて付け木や茅葺き屋根の軒などにも利用した。

このように青苧は衣料から生活用具まで広範囲にわたり利用価値があった。高級衣料原料として奈良方面、のちには北陸方面への供給が衰えた明治時代後半以降も、自給自足的に日用品の原材料として青苧の需要は続いたのである。

#### 今野家住宅と養蚕業

青苧に代わって明治時代後期頃から次第に盛んになってきたのが養蚕である。今野家住宅も三層をもつ養蚕農家としての家屋様式である。昭和9年から12年にかけて今野家所有の山からクリやケヤキなど原木を伐採してそれを材料に建築したという。今野家住宅は屋根が高く巨木の梁や柱が縦横に使われたじつに堅牢な造りであり、養蚕を営むためおよそ15部屋もあるという大きな家屋である。一見して豪壮といえる家屋のたたずまいはあたりの景観を圧倒している感がある。

「おっしゃ神」とは「おしらさま」ともいって養蚕の神様である。旧暦1月15日はおしらさまが描かれた掛け図を祭壇に吊るして祀るお祭りの日である。その際、おしらさまが天から降りて来るときの目印として、雪の庭に杉などの細木を3本か5本伐ってきたものを立てて依り代とする。そして赤飯を炊いておしらさまに供え養蚕の安全と豊饒を祈願した。この日は毎年順番に宿を決めて、そこに年配者の女性だけが集まって祈願した後、飲食して歌や踊りを楽しんだ。「おっしゃ神」「おしらさま」は各地区でやり方は異なるものの、かつては柳川のみならず大江町のほぼ全地区で行われていたようである。青苧とともに養蚕業がいかに生活を支えていたかを物語るものである。



「七夕畑」の様子（柳川）



今野家住宅（柳川）

## イ 中ノ畑

2009年9月2日、松田専一郎氏（昭和8年5月生まれ、76歳）から聞き書きした内容を盛り込んでいる。

### 集落概況

中の畑は江戸時代には黒森村の枝郷として成立していた集落であり、天保13年（1842）頃は幕府領柴橋（しばはし）陣屋支配下にあった。標高330mに集落が形成されており、江戸時代には黒森と合わせて27戸（中ノ畑は15戸）ありその状況は明治時代まで続いた。昭和30年代に24戸まで増えたがその後は減少をたどり、松田専一郎氏が中ノ畑を去った昭和61年頃は18戸くらいであった。現在は定住者がほとんどいないような状況にあり、いわゆる通勤農業を営んでいる人々を見かける程度となった。

### 青苧と生業

中ノ畑も青苧が江戸時代から生業の主力だった時期が長いが、明治時代後半からは養蚕業、昭和に入ってから製炭業へと他地域同様に変遷をたどってきた。青苧は衣料原料として提供していた時代から、北陸各地の上布生産が衰退すると、漁業用の網やロープの原料として売買されほとんど全戸で青苧糸を作っていた。家には袴なども残されていたので、もちろん自家製の衣料原料としても作られていた。また、横糸をスゲ、縦糸には青苧を材料としてゴザも作って売ったり自家用として使用していた。

青苧は多年草で一度植えると10年くらいは芽を出し続けるが、良質の青苧をとるためには排水のよい斜面に栽培された。春先に若芽が20～30cm伸びたところを上にごもくをかけて焼畑を行う。灰が肥料分となり柔らかい青芽が出る。青苧の買い取りは左沢を中心とした近郷の商人たちが主であったが、ときには越後の小千谷など北陸方面の商人たちが直接入り込んで来ることもあった。青苧が次第に養蚕にとって替わられると初めは製糸をして出荷し、まゆ売りは大正10年頃からは行い左沢商人が入って来て買い取り天童・米沢に出荷した。のちには貫見地区でも取引されるようになった（『大江町史 地誌編』）。

### 雷神社と雨乞い

中ノ畑の青苧については、なんと<sup>いかづち</sup>雷神社の社殿内に掛けられた<sup>とちよう</sup>戸帳の存在に注目しなければならぬ。そこでまず雷神社について、創立は永享年間（1429～1441）であり、天正12年（1584）に大江高基の祈願があったという（『七軒東の郷土史』）。日吉造の社殿や真言密教系の両部鳥居、豪壮な山門などをもっており、ひっそりした山間の集落にしてはじつにたたまいの立派な社殿といえる。境内には「文化元年 村中 葉山塔」などの石碑がみられる。また、社殿内には絵馬4点があり最も古いのは明和5年（1768）の「菅原道真左遷雷鳴図」である。

御神体として風神（高さ92cm）、雷神（高さ61cm）が祀られている。この神々への信仰としてかつて8月31日に風祭りが行われ、境内には露店も2、3店舗建つなどの賑わいがあった。また、社殿右側には鏡池があり、いつでも水量が一定しているという伝承があることで知られた。そのためもあって、この鏡池の前で日照り続きの場合は昭和40年頃まで雨乞いの祈禱を盛んに行った。その神事と祈禱は中ノ畑の区長、組長、会計担当者などが中心となって進められた。御神体の雷神を鏡池の前に遷座させ、鏡池の水を汲んで御神体に向け、御神酒や季節の山菜などを供えた。そして太鼓を打ち鳴らし、それに合わせて「龍神様よ（雷様よ）、大雨たもれ、雨たもれ」とみんなで唱え続けたのである。それは毎年のように行われた。この地域一帯は沢が浅くてしばしば干害に悩まされたのである。よって、かなり遠方からの参拝者も多く、時おり、大鉢地区の人々も雨乞いに来ていたという。ときには寒河江、山形からも来ている（『七軒東の郷土史』）。

このように、ひんぱんに行われた雨乞いや風祭りの賑わいから、雷神社は中ノ畑以外の近隣の人々を含めて五穀豊穡や村内安全の神として篤い信仰を受けてきた神社であったことが知られるのである。

### 雷神社の戸帳

多くの信仰を集めた雷神社の社殿内には、青苧で作られた戸帳（大江町文化財指定）といわれるものが多数存在する。戸帳とはこの場合は御神体が鎮座する本殿上部に掛けられた「献納幕」（掛け幕）のことである。戸帳の概要については、昭和60年3月20日付の大江町文化財保護委員会委員長高山法彦氏から大江町教育委員会教育長宛に提出された「文化財指定に関する意見具申」に記されている。それによれば、戸帳総計47

点、そのうち年代が明確なものは43点、奉納者の名前のすべてまたは一部が明確なものは35点、村名が明確なものは34点に及んでいる。昭和56年6月に大江町文化財保護委員の渡辺正見氏が整理した雷神社戸帳「年代順一覧」では、年代の明確な43点と、そこに墨書された判読可能な文字すべてを記している。それを以下に記す。

- ・宝暦年間 8点…宝暦5年（2点）、10年、11年（2点）、12年、14年（2点）
- ・明和年間 7点…明和2年、3年、6年（2点）、7年（2点）、9年
- ・安永年間 3点…安永6年、9年、10年
- ・天明年間 5点…天明元年、3年、5年、7年（2点）
- ・寛政年間 3点…寛政10年、11年、12年
- ・文化年間 6点…文化元年、3年、6年、7年、9年、11年
- ・文政年間 3点…文政5年、6年、8年
- ・天保年間 4点…天保2年、7年、8年、12年
- ・安政年間 1点…安政3年
- ・明治年間 3点…明治2年、7年、11年

### 戸帳の墨書

以上、ここからは戸帳奉納の始まりは「宝暦五年」（1755）、最後は明治11年（1878）であり、この間123年にもわたる営みであったことがわかる。さらに奉納者名は「おつた」「さえ」「おしゆん」「おこん」など圧倒的に女性であった。女性たちみずから青苧を織って奉納していたことが知られる。戸帳には「奉納御宝前 諸願成就之所」「奉納御戸帳 諸願成就之所」などと墨書されており具体的な祈願内容は記されていない。しかし、「諸願成就」等には戸帳の素材に使われた青苧そのものの豊作祈願が含まれていることは推測に難くない。なお、「年代順一覧」には同じ境内に建つ山の神神社にも奉納された戸帳が2点見出されるが判読は不能としている。

最後に「文化財指定に関する意見具申」は次のように戸帳の意義、価値を記している。

江戸時代から地域(七軒)の重要な商品作物であった青苧の糸を利用して地元で織ったと思われる布で作っている。雷神社に長い年代にわたる地元製の布で作られた戸帳は県内でもめずらしく、大江町の産業と信仰の実態を知るうえで、民俗資料、歴史資料としても重要なものである。

まさしく雷神社の戸帳は地元産物第一の青苧を女性たちが丹精をこめて織り、神々に日々の願いを託して掛け幕として献上していた長い歴史を浮かび上がらせるのである。なお、平成21年大江町教育委員会の調査では、雷神社の戸帳総数は59点にのぼることが明らかになっている。



中ノ畑雷神社



鏡池（中の畑）



雷神社奉納  
御戸帳



## ウ 小清

### 小清の概況

江戸時代から小清の枝郷として早坂・又七田・田代・十郎畑・松保があった。これを合わせた戸数は、文化3年（1806）に54戸で人口248人、明治9年、46戸310人であった。小清だけの戸数は江戸期を通じて25戸前後といわれている（『大江町史 地誌編』）。さらに『大江町史』によれば、江戸時代の小物成の記載事項から小清の経済生活はかなりが山に依存しており、田は少なく畑に大豆・ソバ・アワなどを植えていたことが知られる。むろん青苧は江戸期をつうじて栽培されており、明治初年でも、多い家では2反歩の畑から20貫目くらいの収穫があったという。他方、養蚕については、天保2年（1831）銘の「養蚕神」の石碑が確認できることから、おそらく江戸時代中期頃には行われていたことが考えられる。明治30年頃までは蚕卵紙の製造も行い、小清のほか貫見で2か所、沢口で1か所蚕卵紙の製造をしていた。山間の集落として木炭製造もさかんに行われていたことは記すまでもない。

先に触れたように江戸時代から小清地区はいくつかの枝郷からなっていたが、昭和51年に田代と十郎畑、昭和52年は松保が全戸離村しており、現在は小清地区8戸だけが残されている。

小清に見られる豊かな自然景観とともにある茅葺き民家の景観は、山間の集落の原風景ともいえるものであり、今なお使用されている家屋群は伝統的建築文化財としても注目される。厩があった曲がり屋形式のものや養蚕のための三層建築が数軒存続しており、このすぐれた生活文化的景観を地域に住む人々と共にどう保存・継承していくのか大いなる検討課題としていく必要がある。

### 十郎畑と斎藤半助家

旧七軒村十郎畑は小清の枝郷であったが、集落成立にからんで平家の落人伝説がある。集落の標高は500m前後の山間にある。小清川流域では最も早くから開けた集落の一つといわれる。寛文12年（1672）の検地帳では10戸の百姓が存在していることから近世初期には集落が成立していたと考えられる。古来のしきたりで10戸以上に家数を増やすことを禁じていたという。このわずかの集落は江戸時代から良質の青苧生産地として知られていた。江戸時代末期には50貫目以上の生産をしており、さらに明治時代前期には生産量を3倍に上げている。1戸あたり4～5反歩植えられていたのである（『大江町史 地誌編』）。

しかし、明治20年代まで盛んだった青苧は、北陸地方の青苧織物業の衰退によって需要がなくなり30年代に入って激減していった。それに代わって養蚕業が生業の主体となった。養蚕業が最盛期を迎えるのは明治40年代に入ってからである。

さて、十郎畑は小集落ながら村の生活は常に上台衆と下台衆の二手に分かれていた。その下台衆の中心をな

したのが齋藤半助家であった。『歴史の証言』の中には次のような話が掲載されている。

齋藤半助家の先祖、十郎畑の豪商加賀屋は江戸末期に畿内へ特産品の青苧等を販売しました。最上川に3隻の輸送船を持ち左沢へ加賀屋の屋号の支店を2軒かまえ、およそ百年間豪勢な経営を続けたのです。支店2軒のうち御免町にあった1軒が姿を消してそのうち加賀屋齋藤甚右衛門家が脈名を保っています（『歴史の証言』）。

齋藤半助家は「青苧集荷問屋」であり、分家の齋藤権右衛門と齋藤甚右衛門の二人を左沢町内にそれぞれ屋号「加賀屋」という出店2軒に配属させて販売営業していた。

享保10年（1725）の「青苧売仕切状」では、齋藤家は京都へ28駄、奈良へ4駄の青苧を送っており、大坂長浜屋源左衛門に青苧運賃、木津屋与左衛門に青苧19駄運賃を渡していることが記されている（『朝日町史編集資料 第5号』）。齋藤家はこの時期に畿内方面に合計51駄という大量の青苧を売買できる商人であったのである。明治初年頃には田畑等所有地は2町歩を上回る地主ともなっている。齋藤家は旧小清村の名主も務め、明治時代になってからは村役場の要職にもついている。

なお、齋藤家と同じような青苧集荷問屋には、月布地区の大泉市左衛門家や葛沢地区の阿部伝五郎家があげられる。青苧の「荷造問屋」（仲買人）には貫見地区の松田田七・平兵衛・利平衛、小清地区の長左衛門などがあげられる（『七軒東の郷土史』）。

齋藤本家は山間の十郎畑にずっと在住したが、昭和51年に集落あげて離村してその歴史に幕を閉じた。当時の写真を見るに、齋藤家の住まいは石垣が積まれた敷地に池のある庭園を持ち、養蚕用の高い屋根をもつ母屋とそれに続く土蔵があった。一見して豪農の館らしき風格を保っている。文政6年（1823）銘の棟札が残されていて古い民家の歴史を示している。昭和53年には齋藤家を解体、大江町中央公民館協の敷地に移築・復元し、54年から母屋・土蔵ともに大江町歴史民俗資料館として一般公開している。

十郎畑の集落のあった跡地は今や雑木林と化しているが、そのなかでも齋藤半助家があった場所には今でも石垣が残っていて往時を偲ばせている。通勤農業で通ってきているというかつての在住者の新しい家屋が一軒ぽつりと建っているのが印象的である。



旧齋藤半助家



## エ 月布

2009年9月2日、月布在住の大泉義矩氏（昭和5年11月生まれ、79歳）から聞き書きした内容を盛り込んでいる。

### 集落概況と生業

江戸時代から月布川中流域には本月布村と新月布村が成立し、慶安2年（1649）には本月布は戸数17戸で村高149石、一方の新月布は戸数13戸、村高115石であり、青苧代米は両村3石ずつだった。集落は月布川の河岸段丘から山麓にかけて形成されており、傾斜地にはびっしりと青苧が植えられていた（『大江町史地誌編』）。これまで触れてきたとおり、当地域は青苧が産物の第一だったのである。

両村は明治9年に月布村として統合される。明治時代後半になると青苧に代わって養蚕業が大変盛んになってきて戦後しばらくのあいだ産業の主力となる。月布村には株式経営の35人よりの製糸工場があった。一方、製炭業は主に昭和に入ってから始められ従事する人は10人余いた。また、月布川流域には漆の木が生育していたことで知られる。7月～10月頃に越後から漆かき職人が来て月布に宿泊し、許可証である鑑札を持って近くの山々に入って漆の原木から樹液を採取していった。

一方、漆の実じゅうはっさいは蠟ろうの原料ともなっており、宝永6年（1709）に月布の大泉次郎右衛門家おほいづみが月布村のほかに十八才じゅうはっさい、小斬こぢやうな、橋上はしかみ、顔好かおよし、久保くぼ、貫見ぬくみ、小清こせいの集落から蠟の原料としての漆の実を大量に集荷している（『七軒東の郷土史』）。

### 大泉六郎兵衛家と養蚕業

大泉義矩家は江戸時代の本月布村の大庄屋をつとめた豪農大泉市左衛門家の分家筋にあたる。かつて大泉六郎兵衛と名乗り、六郎兵衛宛の明和8年（1771）の「売目録」が残されている古い家柄である。本家の大泉市左衛門家は明治時代末まで大地主であり、青苧や養蚕をあつかって産をなし金融業も営んでいた。しかし市左衛門家は昭和27年に月布から東京へ一家転住し、墓地は残しているものの住宅はなくなっている。

月布一帯は5、6反歩の田圃と養蚕が標準的な農家の姿であった。六郎兵衛家でも青苧以降は養蚕業に従事していた。一年の養蚕は、春蚕・初秋蚕・晩秋蚕・晩晩秋蚕の4回にわたって生産した。晩晩秋蚕は「寒カイコ」といったが、その生産に必要な経費はかなりの農家が製糸会社から前借りをするのが常だった。それは製糸会社側からすれば、春蚕の生産30貫目や50貫目を当て込んでの前金渡しの意味をもっていた。ほとんどの農家はその前金をもとに安心して正月を迎えたのであった。製糸会社は長井にあったグンゼであり、そのほかに上山や高島にもあった。その仲買人たちが前金を各農家に配って歩いたのである。

なお、養蚕業全盛時代でも青苧は家々で取り扱われており、自家製で下駄の緒・帷子・注連縄、ときには蚊帳などにも活用されていた。

### 月布の賑わい

月布のみならず他集落も含めて昭和50年あたりまでは養蚕や稲作、あるいは炭焼きで生活が成り立っていた時代であり、月布には6軒もの商店があって一定の賑やかさを保っていたのである。その背景の一つには、昭和18年に創業した国峰硫化工業月布鉱山の存在があった（ベントナイト採掘、現クニミネ工業鉱山）。農家の人たちは鉱山の従業員として午前8時から午後4時まで、農作業の合間をぬって勤務することが可能であり、冬期間出稼ぎに行くことも免れた。鉱山従業員の勤務は三交替制で200人以上が従事しており、そのための寮や社宅など数十棟が立ち並んでいた。大量の従業員たちが集落に在住した影響は経済的効果のみならず少なくなかったと考えられる。

### 大泉家と他集落の関係

昭和50年までは月布の後方山間には大鉢おおぼちと小柳の両集落が存在した。当時は両集落合わせて33戸あったといい、本郷西小学校大鉢分校には生徒30人～40人がいたといわれる。両集落の人々は用件があれば山を下りて月布を通過して左沢方面へと向かったのである。その際、大泉義矩家おほいづみがその道筋にあたり中継的な役割をはたしたという。例えば、長い道のりの途中で雨が降ったりすれば傘を貸してあげ、暗くなれば弓張り提灯も貸してあげた。あるいは長靴に履き替えたり、着替えをしたりすることもあった。まさに「立ち寄り所」の

ような家だったのである。これに対して、大鉢・小柳の人々は御礼の気持ちを込めて、幾度ならず山の幸を持参し、また弓張り提灯に必要な蠟燭2本を添えて返却してくれた。このように集落を越えた心温まる交流が何年となく続いてきた。それはまるで親戚付き合いのようだったという。

ところが、山間の集落の過疎化が激しくなり昭和51年に全児童が転出し大鉢分校が閉校した。同年、小柳は全戸離村、翌52年には大鉢も全戸離村して山を下りた。この頃山間の集落は次々に廃村となっている。大泉家と他集落の人々との人情味あふれる関係はもはやどこにもみられない時代となった。月布地区は現在およそ50戸近くあるが、昭和56年には86戸あったというから約30年間で30戸以上がなくなったことになる。ここにも急速に過疎化は忍び寄っている。



大泉家所蔵の提灯



月布集落

## オ 小新

2009年9月1日、渡辺登美男氏（大正10年10月生まれ、88歳）と結城かねよ氏（昭和3年2月生まれ、81歳）から聞き書きした内容を盛り込んでいる。

### 集落概況

小新は藤原氏の流れが定着して成立した集落という伝承をもつが、歴史的事実として寒河江慈恩寺の御朱印地であったということからも由緒のある土地といえる。「元禄郷帳」によれば、小新村は30石余の慈恩寺領であった。享保6年（1721）の「慈恩寺領田畑并人数帳」にも「高三拾石四斗四升」とあって変化はほとんどない。またそこには田畑耕作者である農民の戸数について「百姓拾四軒」と記されている（『大江町史 地誌編』）。村の鎮守として弥勒堂があり、そこに鎮座する御本尊は慈恩寺弥勒菩薩を分祀した弥勒菩薩座像であり室町時代作といわれている。一方、お堂には脇仏としてまさに優品といえる大日如来座像も安置されており、これは鎌倉末期の作といわれている。この仏像は古くから小新にある真言宗天照山来迎寺の御本尊だったのでないかとの説がある。来迎寺は寒河江総持寺門徒で慈恩寺の末寺に位置づけられていた寺である。

小新の弥勒堂にかかわる大きな行事には慈恩寺最上院の僧侶が来ていた。弥勒堂の別当は結城弥一郎家が代々務めており、毎年旧暦3月5日の弥勒堂祭礼日には集落の5つの組が手方となって赤飯のおにぎりを各家々に配って酒肴でご馳走してきた。現在弥勒堂の祭礼は4月5日に移行しているが、おそらく、小新の村づくりは弥勒菩薩信仰を精神的支柱として行われてきたものと考えられる。以前から小新衆は「きかない」（鼻っ柱が強い、威勢が良く荒っぽい）との評判があったという。かつて慈恩寺領であったがゆえのプライドがそうさせたのであろうか。

弥勒堂のすぐそばには県天然記念物の神代カヤ（樹齢推定1,000年以上）がそびえている。弥勒堂のほかに、山の神、不動明王、地藏堂、稲荷神社などがあり、人々の神仏への崇敬の念の篤さを物語っている。

かつて小新は旧本郷村に属していた。明治11年で23戸が暮らしていたが、昭和35年には28戸（189人）まで増えた。しかしその後、昭和50年には21戸（82人）となり、現在は15戸（40人）と漸減している。

集落は一人暮らしが3人、子どもは1人も住んでいない状況であり、今では過疎化が深刻化している。

#### 青苧の生産とくらし

小新でも緩い傾斜地は青苧が栽培されており、昭和10年頃までは女性は皮はぎ、男性は皮ひきを行っていた。左沢のマルヤが集荷業者として来村して買い取っていた。青苧は帷子の原料でもあり、格式ある家の葬式では青苧製の薄茶色の紋付が着用された。また青苧蚊帳も夏場の必需品としてよく使用された。上棟式で使う建前人形では人形、鏡、握りハサミをつなぐ材料として青苧糸が使用されていた。青苧糸は下駄の鼻緒にも利用されている。苧おがら（青苧の乾燥した茎）は付け木の代替え、茅屋根の軒下支えなどに使った。一般農家ではわらの布団だった時代に、旦那衆では綿の代替えとして青苧を叩いて綿状にした「からむし布団」を使用した。

#### 養蚕業

『大江町史』によれば、小新では大正初め頃から青苧畑に桑が植えられるようになり養蚕に変わっていった。一戸で年間200貫ぐらのマユをとり、5人くらいで絹とりをした。大正中期にはマユ売りとなり大谷の商人が買い付けにきて馬車で運んだ。養蚕が盛んな頃は桑が不足して市ノ沢や左沢周辺から買っていた（『大江町史 地誌編』1985年）。養蚕は春・夏・秋の3回行ったが、小新では生業としてほぼ全戸が養蚕を行っていた。「天竺飼い」といって屋外でカイコを飼っていたが、当地では一斉駆除として田んぼに農業を散布するようになってからカイコは糸をはかなくなり、養蚕は生業として成り立たなくなっていった。



弥勒堂（小新）



弥勒菩薩坐像（小新）

#### カ 橋上

2009年9月3日、柏倉清助氏（昭和6年生まれ、78歳）から聞き取りした内容を盛り込んでいる。

#### 集落概況

橋上地区はかつて橋上村であったが、明治22年に本郷村に編入され、昭和29年には漆川村、さらに昭和34年に左沢町と合併して大江町に編入されている。伝承では最上家の家臣であった柏倉久右衛門や柏倉佐治右衛門が当地域に移り住んで、その一族が橋上村を構成したという。橋上では柏倉性が圧倒的に多いのも事実である。

橋上には寒河江荘を藤原氏が領有していた時の関係で古くから春日神社が建立されていたが、これに江戸期から当村にあった赤城神社が合祀されて現在の赤城春日神社と称された。赤城春日神社は橋上村の鎮守であり大変由緒あるお社といえる。赤城春日神社境内には天明・享和年間銘の「庚申」塔、宝暦・明和年間銘の「宇賀神」、文化年間銘の「金比羅」、文政年間銘の「大神宮」などがあり、その他弁財天、大明神、湯殿山、月待供養などの石碑群がひしめいている。地域の人々の信仰の篤さを物語る。

#### 青苧と養蚕

他地区同様に、橋上もかつては青苧と養蚕が盛んであった。昭和50年頃、地区にある100年ぐらゐ経過

した古い民家がいくつか解体されたとき、それぞれ跡地から青苧の茎が現れた。かつては家々で青苧栽培をしていた時期があったことを示している。戦時中の食糧難だった頃に、地域の人々は青苧畑をカボチャ畑に転用しようとして青苧の根を引き抜いて土手あたりに投げ捨てていた。青苧は衣料や日用品の材料として多面的に利用したが、たたみ糸として使っていた時期もある。

養蚕業も大変盛んに行われ、蚕の神様である「おっしゃ神」への信仰も篤く毎年信仰行事を繰り返して良質繭玉の豊作祈願をしていた。養蚕の発展を願って白鷹山の虚空蔵菩薩へ直接のお参りに行くことも行われた。繭玉は左沢の仲買人が買い集めて上山、長井、高畠などの製糸工場へと売り捌いていた。

以前から当地方では葉タバコ生産も行われており、養蚕用の桑畑と煙草畑が接近すると葉タバコのニコチンが桑の葉に伝播してそれを食する蚕が死に至る、または繭の品質を低下させるという問題が発生している。葉タバコ生産者と養蚕者のあいだにトラブルがおきた場合は調停員を立てて解決をはかっていた。昭和40年代頃に養蚕業が衰退すると桑畑を水田やリンゴ畑に転用したり、ホップ栽培や酪農へと転換していった農家もある。



赤城春日神社（橋上）

## キ 葛沢

2009年9月3日、葛沢の阿部信夫氏（調査当時81歳）から聞き書きした内容を盛り込んでいる。

### 集落概況

江戸時代の葛沢村は松山藩領左沢陣屋支配下におかれたが、明治15年からは本郷村に編入され、昭和29年に七軒村と合併して漆川村に帰属した。さらに昭和34年には漆川村と左沢町が合併して現在の大江町が生まれたのであるが、葛沢は旧本郷村と旧漆川村時代に役場が置かれ中心地としての役割をはたしてきた。多いときの地区戸数は27戸ほどあったが現在は16戸である。近年は稲作のほかリンゴ・ブドウなどの果樹栽培が盛んな地域である。

なお葛沢の枝郷として月布川支流の梵字川上流に立地する軽井沢がある。葛沢とは2kmも離れた山間にあるが、軽井沢の地番として「本郷甲」とあるのは古くは葛沢村に含まれ、後に旧本郷村に属していたことを示すものである。北へ山越えすれば西川町吉川方面に抜けることができる。このルートは本道寺にもつながる出羽三山行者の信仰の道でもあった。

### 阿部伝五郎家と上方との関連

阿部伝五郎家の現当主信夫氏は13代目である。阿部家は江戸時代中期頃から、青苧、漆などの集荷と出荷を手がけて産をなして豪農となった。天保年間頃には北郷組の大庄屋までつとめ、末期頃には藩主、武家などに金融貸与を行うほどの大地主に成長した。明治以降は青苧に代わって盛んとなった養蚕からの生糸を主として扱ったり、醤油の醸造業を営んだりしている。

阿部家は明治5、6年に大坂に漆を積み出しており、江戸時代から盛んであった月布川流域に生育した漆や木の実の採取が明治初期頃にも行われていたことがわかる（『七軒東の郷土史』2000年）。

明治19年には貫見集落附近で月布川から取水した「南堰」といわれる用水路が開削されて月布川右岸の田んぼを潤した。これは橋上村ほか12か村戸長の渡部大八の指導のもとに行われたものであるが、阿部家も当時の金額で3,750円の資金を融資したといわれている。阿部家はこのような社会事業にも参画して稲作生産と農民の生活向上に寄与している。

旧本郷村と旧漆川村の時代は葛沢に役場が置かれていたが、その土地は阿部家のものといわれ、そのほか駐在所や旧本郷中学校などの敷地も阿部家所有のものだったという。昭和13年に12代目がつくった村山本郷郵便局は特定郵便局でありみずから局長を務めている。

阿部家は江戸時代後期から明治時代に最も繁栄をきわめた。そのことは残された多くの「売仕切帳」などに示されており、特に青苧、紅花、絹糸などの売買の記録「慶応三卯歳 京都 江州 越中 取引帳」「越中表金銭出入請払勘定帳」などは、最上川舟運を活用した北陸や上方との商取引の姿の一端が明らかにされている（『大江町史資料 第4号』）。阿部家の庭園に今も咲き続けるしだれ桜は舟運時代に京都から持って来て植えたたと伝えられている。いつの時代かは不明であるが青苧で作られた袴は現在も阿部家に保存されてある。

上ノ山にある二渡稲荷神社は、阿部家が慶安年間に山城国の稲荷神社を勧請して祀ったものであり、以前は元本郷中学校の場所に鎮座しており、祭田二反二畝歩があって氏子20戸によって村の鎮守神としての機能をはたしてきた。昭和23年に本郷中学校が建築される時現在地に移設されている。例祭日は旧3月19日と10月19日であるが、そのほかに初午、8月31日風祭り、年末の大祓いなどが行われている（『大江町史地誌編』）。

なお、伝えによると舟運時代に青苧や紅花等の商品を北前船で運んでいる最中に船が難破したことが阿部家が傾ききっかけとなったという。

#### 庚申講などの庶民信仰

当地区は以前から庚申講がじつに盛んであった。「南無地藏菩薩」「南無観世音菩薩」を48回も唱えながら立ったり坐ったりを繰り返して参拝する（現在は24回に減少）。基本的に男性が講員であり、戸主が都合あって不参加の場合は小学生の子どもも参加したほど信仰心のあるものだった。かつては10戸が加入していたが近年では7戸に減少している。高松寺境内に建てられている江戸期の庚申塔群（享保年間、寛保年間、宝暦年間に建立）は過去の実態を語る文化的な遺産でもある。

当地区は庚申講のほかにも観音講や地藏講も大変盛んであった。観音講は昭和14年から平成20年までの記録がきちんと保管されており、現在も継続中である。地藏講の際は、阿部家において集落の人々が集まって金春流の謡曲を歌いあげるのが常だった。地藏講は昭和35年頃まで続けられたが現在は廃絶している。



葛沢集落

### ③ 集落と外部の関係

ここまで、聞き書きと文献記録をたどって、柳川から葛沢の各集落の青苧と養蚕を主とした生業と暮らしを再構成してみた。繰り返すが、その構成の観点とはこれらの農山村は左沢あるいは寒河江など他地域と経済的・文化的にどのような関わりをもって成り立ってきたのかということであった。この問題意識は、最上川舟運・寒河江街道・出羽三山往来などがもたらした富・豊かさが、それを受けて成立した左沢の町場を經由してどのように農山村にも影響を与えたのかの問いにつながっている。ここでは特に商業経済的交わりという部分を中心に農山村と左沢の町場そして舟運・街道との関連事実を取りあげてみる。

#### 製炭とその流通

七軒地区において、昭和初期から製炭業も盛んとなり、七軒村の木炭は左沢方面の人々の生活に必要な燃料となった。反対に本郷・左沢産の米が七軒村へと運ばれていて相互経済交流がみられた。同じく②から木灰は左沢の間屋に売り渡され谷地・長崎・山形方面に行ったということも知ることができる。

#### まゆの取引

中ノ畑では、まゆ売りは大正10年頃に行い左沢商人が入って来て買い取り、天童・米沢に出荷した。のちには貫見地区でも取引されるようになった。橋上地区でもマユ売りは左沢の仲買人がきていたことがわかる。

#### 御戸帳と青苧

中ノ畑の雷神社にみられる江戸時代から奉納され続けた59点の戸帳のみごとさは、大江町全体の青苧文化を象徴する貴重な文化財といえる。このことも山間の集落と左沢が介在する最上川舟運とが深くかかわった結果であることを示している。

#### 青苧の集荷と青苧問屋

十郎畑の斎藤半助家が「青苧集荷問屋」を営み、分家の斎藤権右衛門と斎藤甚右衛門の2人を左沢町内にそれぞれ屋号「加賀屋」という出店2軒に配属させて販売営業していたことが知られる。享保10年(1725)の「青苧売仕切状」では、斎藤家は京都へ28駄、奈良へ4駄の青苧を送っており、大坂長浜屋源左衛門に青苧運賃、木津屋与左衛門に青苧19駄運賃を渡していることがわかっている。明治初年頃には田畑等所有地は2町歩を上回る大地主ともなっている。斎藤家は小清村の名主も務め、明治時代になってからは村役場の要職にもついている。

このように最上川舟運を活用した斎藤家の青苧集荷業は、青苧畑をもつ農山村と河岸のある左沢および遠方を含む地域とが経済的に一体化していたと捉えることが可能である。一人斎藤家の繁栄ばかりでなく、「山間の心豊かな暮らし」で触れたように、十郎畑・田代などの農家の人々もまた青苧で得た一定の潤いを背景に、村の鎮守の前で連句会を催すなどの文化的生活を楽しんでいたことも大いに注目される。

#### 中世慈恩寺文化との関係

小新は荘園との関係で藤原氏の流れが定着して成立した集落という伝承をもつ。歴史的事実として寒河江慈恩寺の御朱印地であり、江戸時代は30石余の慈恩寺領であった。村の鎮守として弥勒堂があり、そこに鎮座する御本尊は慈恩寺弥勒菩薩を分祀した弥勒菩薩座像であり室町時代作といわれている。小新集落はおそらくこの弥勒菩薩を精神的支柱として村づくりを行ってきたであろうと推測される。大江町の山間の村々の信仰生活を中世慈恩寺文化との関連においてあらためて見直すことも必要である。

#### 青苧の利用と流通

小新では昭和10年頃までは女性は青苧の皮はぎ、男性は皮ひきを行っており、昭和に入ってから自家製の青苧の存在が注目される。左沢のマルヤが青苧集荷業者として来村して買い取っており、青苧を媒介とした山間の集落と左沢との経済的つながりには長い歴史がうかがわれる。

#### 広域的な交流

葛沢地区の阿部伝五郎家は明治5、6年に大坂に漆を積み出している。このことから、江戸時代から盛んで

あった月布川流域に生育した漆や木の実の採取が明治初期頃にも行われていたことがうかがえる。阿部家に残る青苧、紅花、絹糸などの売買の記録「慶応三卯歳 京都 江州 越中 取引帳」「越中表金銭出入請払勘定帳」などからは、最上川舟運を活用した北陸や上方との商取引の姿の一端が明らかにされている。阿部家の庭園に今も咲き続けるしだれ桜は舟運時代に京都から持って来て植えたものと伝えられる。また、上ノ山にある二渡稲荷神社は、阿部家が慶安年間に山城国の稲荷神社を勧請して祀ったものであるという。このように阿部家をとおして遠方の上方方面と当地域が密接に関わりを持って発展してきたことが理解できる。

なお、地蔵講の際は阿部家において集落の人々が集まって金春流の謡曲を歌いあげるのが常だったという。地蔵講は昭和 35 年頃まで続けられたが現在は廃絶している。

阿部家だけの繁栄にとどまらず、阿部家に集いながら謡曲を歌い合う粋な文化が葛沢の人々によって行われていた。こういう事実についても、最上川舟運・出羽三山往来等の広域的交流の成せるものとみることができる。青苧がもたらす恩恵

『大江町の歴史探訪 地名を探る』の「十郎畑」の項には、次のようにある。

商品作物として青苧が植えられた。七軒苧は古くから知られているが、中でも良質の青苧産地といえば、十郎畑と七夕畑だった。南西にある斎藤ハゲは地滑り地形で、地滑りの土地は青苧栽培に適していた。春早く青苧焼きをしたあと堆肥を一面にかける。青苧づくりは仕事が多いので、年季奉公の若衆が 2, 3 人いた。ほかに秋の青苧刈りから引き方、はぎ方などに 10 人くらい雇った。幕末に 50 貫以上の麻糸を生産したが、明治期には収量が増加してその 3 倍に達した。

このように、十郎畑のある七軒村をはじめとする現大江町の山間部では青苧栽培による経済的豊かさが注目されるが、その生産は江戸時代末期よりも明治時代に入ってからいよいよ隆盛を極めたことが認められる。青苧の隆盛は西村山地方全体にわたり養蚕に変わる明治 30 年代まで続くことは統計上からも十分窺い知れる(前年度報告書表 2 参照)。

さらに、『イリの村の生活とこども』では次のようなことが記されている。

十郎畑の斎藤鹿之吉(半助家)が加賀屋と称する荷主商売を始め、最上川の左沢港に出店を持って、収集発送していた。確実な統計はないが勝生部落においても、農家における現金収入は青苧が第一位を占め、明治中期ごろまで宮宿の海野林蔵や、松程(朝日町)の阿部清吉等を仲買人として、主として小千谷方面に売さばっている。勝生では 1 反歩平均産出量は 16 貫目ぐらいで、年産額が 160 貫、1 把 200 目にして 2 把 1 歩というのが通り相場であったというから、この計算ですれば年産 200 両、一戸平均 10 両の現金がはいったことになり、山間農村の収入としては少なくない額である。

以上であるが、勝生とは月布川の支流小清川の最上流に位置する海拔 480m のまさに典型的な山間集落である。高度経済成長期の昭和 46 年に廃村になったいわゆる過疎の村であるが、上記の青苧による一戸平均 10 両という収入はかなりの現金収入といえよう。この数量が確かなものであるとすれば、このことは勝生のみならず、優良青苧を産出できた七軒地域周辺集落でも同じような状況にあったことが考えられる。

橋上の柏倉氏が「若い頃から七軒方面の人々は裕福にみえた」と語ったのが印象深い。山間集落に対して裕福にみえる実感とは現代では理解しにくいだろう。江戸期に七軒村が天領であり人々はその歴史性・伝統性からそう受けとめてきたのであろうか。考えられることは、地域一帯が高価な換金作物である七軒苧を産出できた地域であり、そこに生まれる高い経済性に対して周辺農家は羨望の目を持って見つめていたのではないかということである。

### (3) 生業にまつわる行事と信仰

#### ① 年中行事

各時代を通じて稲作が生業の代表的なものであることはいまでもないが、大江町においては、江戸時代から明治時代中期頃までに全盛であった青苧、および大正時代頃から盛んになった養蚕等が生業の中心をなした時期もある。ここでは、これらの農村の生業にかかわる行事や村人の切実な庶民信仰とはどのようなものであったかをみてみたい。以下は、季節ごとに主なものを取りあげてみたが、現在は廃絶しているものも含んでいる。なお、参考として大江町老人クラブ連合会編『大江町の年中行事』、佐竹与惣治『おらだの村 田代』、大江町老人クラブ連合会『大江町の石仏』、『村山民俗学会』第7号などを活用した。

#### ア 団子さし (旧暦1月14日が多い)

ミズキの枝に紅白の団子をさし、縁起物の「ふなせんべい」などを多数吊り下げて家の中に飾ったものである。中央の太い幹は昆布で巻きそこに大型の巾着餅を付け、さらにミゴに餅をつけ十六団子も下げた。主として豊作祈願を祈ったものであるが、「繭玉飾り」ともいうように養蚕農家の繁盛も祈る。また商家にとっては商売繁盛を祈るものでもある。塩の平では旧暦2月1日に年祝いの行事をしてから団子をとった。

#### イ 雪<sup>せつちゅう</sup>中田植え (旧暦1月15日が多い)

「庭田植え」ともい、積もった雪の上に一坪程度の範囲で豆がらと稲藁を束にして田植えのように植えていき豊作を祈願する行事である。その年の歳徳神がいる方角をアキというが、雪中田植えはアキの方角に向かって行なうものとされ、植え終わったらアキに向かって手を合わせる。

#### ウ 「地蔵様たがき」と「山の神様たがき」 (旧暦1月15日)

沢口<sup>さわぐち</sup>、中沢口<sup>なかさわぐち</sup>、南又<sup>みなまた</sup>、柳川平<sup>やながわだいら</sup>などの村々で、火祭りであるオサイト（お斎燈・お柴灯）の夜に行なわれた。沢口では子供組と大人組の二組が行なったという。お地蔵様や山の神様の御神体をだいて家々を訪れてお賽銭をいただく行事である。特に山の神信仰は篤く、そのあらわれとして「山神」の石碑は大江町で38基が知られている。山の神の堂社をいれば膨大な数になるかと思われる。

農民にとっては山の神は旧暦2月12日（地区によって多様）に山から降りてきて田の神となり、10月16日（地区によって多様）にはまた山の神に戻ると信仰されてきた。一方、山で生計を立ててきた狩猟、炭焼き、林業従事者などにとっての山の神は一年中山中において見守る神様である。

#### エ 葉山福田講 (おふくでん、旧暦1月20日)

この行事は村山葉山の作の神信仰にもとづく行事である。<sup>しおのたいら</sup>塩野平では昭和34年まで行われていた。その内容を以下に記す。1月19日午後から青年会のメンバーが光養寺に集まり出す。各自持参する食べ物は、餅米一升、茶碗一つ分の味噌、納豆、醤油である。調理用具として臼、手つきぎ、羽釜、蒸籠、薪等を準備する。そのほか各自の布団も持参する。まず光養寺で自炊し一泊する。翌日20日は午前3時に全員起床して素足で雪を踏み、外にあるつるべ井戸より水を汲み上げて水垢離をとる。さらに囲炉裏の火を塩で清めて餅米を蒸かし味噌汁もつくる。餅米がふけると太鼓や鐘を鳴らし、それに合わせて「よいどおよい、よいどおよい」と勇ましい掛け声をあげながら餅を臼で搗く。搗き終わると勝ちどきをあげる。そして寺の地蔵様と葉山の方角へ餅を供えて全員で拝む。搗きたての餅は味噌汁のたれにくぐして納豆をつけて食べる。食が終わると再び太鼓と鐘を鳴らして「やあー」と勝ちどきをあげる。これらの儀礼行為は夜が明けない前に行う。食事が終わっても日中は一歩も寺の境内から外へは出ない。午後3時からまた朝におこなったような餅搗き儀礼を繰り返す。それが終われば翌朝食べる魚を買い出しに行く。21日は最後の「あとふき」といわれる儀礼。ご飯と魚の朝



食をとる。新嫁のいる家では清酒1本を贈る慣習があり、それを参加者は飲むが、ない場合は買ってきて飲む。あとは昼食をとって解散する。この行事には妻の妊娠中は参加できなかった。

この行事は、市の沢地区のように若衆の当番の宿に泊まって行っていたところもある。市の沢では搗きたての餅を葉山大権現に供え、全員で「葉山南無帰命頂礼、懺悔懺悔六根清浄 葉山は日光月光、願葉師瑠璃光如来拜」と三回唱えて豊作を祈願した。なお、材木地区ではこの日は直接葉山に登拝して、大円院から赤いお札をもらい受け水口に突き立てて虫除けとした。福田の行事は久保地区でも行われていたという。

#### オ おしらさま（旧暦2月16日）

「おしらさま」は養蚕の神様として信仰されている。それは片手に桑の木を持った女性神であり、この日はおしらさまが描かれた掛け図を祭壇に吊るして祀るものである。その際、おしらさまが天から降りて来るときの目印として、雪の庭に杉などの細木を3本か5本伐ってきたものを立てて依り代とする。この木を「おしらぼけ」という。この方法は貫見、沢口、柳川平、徳沢、切留などで行っている。

また、団子を繭玉の形にこしらえておしらさまに供え養蚕の安全と豊饒を祈願した。これは大江町のほぼ全地区で行われたようである。なお、中の畑では「おっしゃがみ」ともいった。白鷹方面でも「おっしゃがみ」「おっしゃさま」と言っている。

なお、石碑「蚕神」が大久保地区に1基みられる。明らかに養蚕の神を祀ったものである。この碑の前で、正月あるいは秋に女性たちが「おしら講」をつくって祝祭を行ったものと伝えられる。良質の繭玉が多くとれますようにと蚕神に願った人々の切実さが浮かんでくる。

#### カ 大田植え（田植え終了後の夜）

当地方には、田植えを手伝ってくれた人々を招待して賑やかに祝宴を催す慣習があった。その際に豆俵というものを作って祭壇に供える。柳川や檜山では、ホウの木をたくさんとってきて、その葉に大豆と餅干し（あられ）を炒って昆布をいれたものを包むそれが豆俵である。それをホウノ木に吊るして床の間に飾り、田の神様の依り代とするのである。

塩野平のやり方は次のようである。豆と餅ぼし・団子ぼしを炒り、ホウの葉に一個一個包む。それを夕食のお膳のわきに配る。そのほかホウの木の枝の何か所かに下げ、さらに田の神の床の間と大黒様の前に供える。夕食は白いご飯、ふきを食べる。ふきは富貴につながり縁起が良いとされた。この日は風呂に入らない。風呂に入ると苗枯れするといわれた。

以上、大田植えの行事は各地区で戦前までかなり大がかりに行なわれたようで、そのやり方も多様であったが、現在ではほとんど行われていない。



おしらさまの軸（黒森）

#### キ 蚕餅・お蚕上げ餅（6月末か7月はじめ）

春蚕が上簇して繭の売り渡しが終わると、養蚕農家はみな餅を搗いて蚕神を祀り無事豊産を感謝した。この日は養蚕を手伝ってもらった人を招待して感謝する。朝から餅をついて、この日は農作業を休みにするのが慣習だったので「蚕さなぶり」「田植えさなぶり」ともいった。昭和50年代始め頃には養蚕は行われなくなり、必然的にこの行事も廃れた。

#### ク 虫送り（5月末～9月上旬のあいだ）

稲につく害虫を火の力で村の外に追い出そうとする行事である。「うんか」や「いねのずいむし」などの虫害をなくすため、かつて藁束を燃やして虫を寄せ集め焼き殺したことにちなみ、子供や大人が集団をつくり松明に火をつけて笛や太鼓を鳴らしながら村はずれまで行進し、虫を追い出す意味をもつ。現代では害虫防除と豊作祈願を願う呪術的な要素をもつ。

#### ケ 風祭り（二百十日の前日が多い）

この頃は台風が本土を襲うことも多く、収穫前の稲など農作物に被害がないように風の神に祈るのが風祭りである。古くは、『延喜式』巻8にあるように延長5年（927）奈良の龍田神社で行われた「風神祭」が知られている。大江町の農村部では、各集落の鎮守の神様に被害防止と豊作を祈願するため地区民が神社に集まって神事を行い、終了してから直会をする行事が行われてきた。ただし、神輿渡御や囃子屋台、あるいは伝統芸能が伴うようないわゆる祭礼行事ではなかった。

#### コ 刈り上げ（10月1日頃）

稲刈りが終わり田の神が山の神へと戻る前に、収穫した米で餅を搗いて田の神（または山の神）に供えてその年の豊作に感謝する行事である。「刈り上げ餅はホイト（乞食）も搗く」という言葉が広く伝承されているように、大江町では左沢を除いてどの集落でも刈り上げ餅は搗いたようである。そのやり方はいろいろで、例えば上北山地区では、旧暦十月一日前夜に餅を搗き、その半分をお供え餅として作って新しい箕に入れ、さらに白の上に供え、箕の周りに米、鎌を供えて祭る。残り半分の餅は、小豆餅、納豆餅、雑煮餅などにして家族一同でいただいた。箕や白、鎌などの農具への感謝の心も表れている。一年間の稲作作業の締めくくりの行事として大切にしてきたことがうかがわれる。

#### サ 石碑「青苧権現」

伏熊地区に1基みられる。『大江町の石仏』には、「青苧姫を祭った神。機織りの女性が中風になりかけた時、青苧を煎じて飲んだら治った。それで中風よけの神として崇めている。更に、青苧、機織り、中風よけの神として高畠町亀岡文殊様の境内に青苧大権現神社が祀られている。」と記されている。

このように、伏熊の「青苧権現」碑への信仰は、良質青苧の大量生産の願いが中心となっているのではなく、健康祈願、病氣治癒の祈りが強く表現されているものであり、中風の神として信仰されているという。これには意外な感をもつが、山形県内内陸部に見いだされる8基の同種の石碑は、現在ではすべて中風除けの信仰を集めたものであり、ほとんど青苧栽培・生産に関する祈願の対象にはなっていないのである。「青苧権現」碑は山形県外にも広範囲に見られる石碑であり、ほとんどは仙台市宮城野区岩切にある青麻神社を本社に持っている。青苧は強い糸であり簡単には切れないことから、血管が切れないようにとの素朴な願いから信仰対象となったかも知れない。しかし、かつて青苧の特産地としてその栽培や生産にかかわる信仰がなかったのだろうか。じつは、山形と並んで青苧の特産地であった福島県南会津郡昭和村の「青苧権現」碑（文化8年）は、糸紡ぎや機織りが上手になるようにとの願いがこめられたものである。このことについては今後の研究課題としなければならない。



「青苧権現」(伏熊)

## ② 田代三吉神社のお祭り

### ア 三吉神社祭礼概況

日 時：2010年6月6日（日）午前10時～12時30分

場 所：旧田代集落三吉山

祭 日：旧暦4月8日および8月8日（現在は5月末か6月初旬の日曜日）

参加者：8名（大江町在住者6名、寒河江市在住者2名）

社 殿：石造小祠（万年堂）高さ約1m（目測）

#### [小祠銘文]

- ・後方「明治三十二年十月十五日 齋藤半助」
- ・右側面「世話 佐竹伝助 同 幸吉」
- ・台座「田代・小清・十郎畑・道海・沢口・柳川」などの集落名と26の寄付者名が刻印

#### [三吉神社建立経緯]（佐竹与惣治著『おらだの村』平成16年も一部参照）

明治33年（1899）に秋田県の太平山三吉神社から分霊。発願主は佐竹伝助が発起人となり、佐竹幸吉と十郎畑の齋藤半助が中心となって万年堂を建立した。寄付金は田代集落以外から勝生、小清、貫見、道海、沢口、柳川、金谷原、中郷、左沢などに広がっている。別当は佐竹伝助（与惣治）家と佐竹幸吉（武雄）家の両家ですとめる。明治32年8月8日は参道入り口付近に土俵を作り花相撲を行っており、その時の「三吉神社寄附簿」が残っている。

### イ 旧田代集落概況（諏訪神社を中心に）

田代は標高約380メートルにあった山間の集落である。水田は集落の周辺と谷に沿って分布し面積は3ha程度である。畑はかなりあって青苧や養蚕が盛んだった。山林には恵まれており多い人では約30haも所有し、人々の収入は山仕事から得るものが大部分だった。

朝日岳信仰に関係するとされる鎮守の諏訪神社創建は、「縁起書」によれば正長元年（1428）である。このことから、諏訪神を中心として成立したと思われる田代の集落形成は中世までさかのぼることが考えられる。田代では佐竹伝助家が開拓者として草分け的存在であるが、一方では諏訪神社の別当であった佐竹新兵衛家も



田代三吉神社祭礼



田代三吉神社万年堂

古くから存在し、田代ではこの佐竹二家を中心に集落が形成されてきた。

田代は小清の枝郷であり、小清とは約4 km離れていた。南1 km先には十郎畑があった。村の行事は親村の小清と一緒に行うものが多かったが、若衆契約は十郎畑と一緒にだった。契約は、11月23日に各戸から1名が参加して、田代と十郎畑とがそれぞれ二軒ずつ組を作り、分家は本家が属している組に入って一年間の慰労と親睦を兼ねて飲食するものであった。このように小清、田代、十郎畑の3集落の繋がりは深く、人々が共通に祀る神が村社の諏訪神社（諏訪神）であった。

しかし、昭和40年頃から他地域に移転する人が増え始めて過疎化が進み、その後は離村者の増加に歯止めがかからなかった。昭和51年に諏訪神社の最後の祭りが行われ、それ以後は田代の集落は消えていった。十郎畑も同年に廃村となったが、小清は現在も存続している。昭和55年に田代の諏訪神社は小清に移築されている（『大江町史地誌編』『おらだの村』）。

ウ 佐竹与惣治氏（昭和9年10月25日生まれ、75歳）への聞き取り

調査日：2010年6月6日及び8月3日

居住地：大江町本郷丁下原地区

[聞き取り内容]（要約）

### 三吉神社祭礼

三吉神社のお祭りは、かつては旧暦の4月8日と8月8日の年2回行っており、昭和23年頃までは8月8日も祭りを行っていた。廃村となった現在は年1回で、皆の都合を聞いて5月末か6月はじめの日曜日に行っている。廃村の翌年の昭和52年以来、一度も欠かさずみんなが集まってお祭りを行ってきた。2、3年前のお祭りでは20人くらい集まったが、近年は80歳代の方々が大部亡くなったので参加者は減り続けている。大江町本郷の下モ原地区しもぼらに田代から6軒移住したが、そのほか寒河江市や仙台市にも住んでいる方がいる。我が家は昭和48年に4軒とともに下原地区に移って来た。

祭りにはできるだけ参加しようと連絡し合って、年一回かつて同じ集落の仲間が集まっている。みんな食べ物を持参して三吉山に登ってきて、参拝したあと万年堂の前にビニールシートを敷いてお昼頃まで飲食している。この間は昔を懐かしんだり近況を語り合ったりして半日を過ごしている。

万年堂に記された寄付者26名の中には斎藤半助の息子「斎藤鹿吉」の名が見える。10数年前から斎藤家の方もお祭りに参加している。「佐竹伝助」は我が家の先祖であり、代々三吉神社の別当を務めている。

### その他の祭礼行事

田代の集落には神様がいっぱいあってみんな信仰が厚かった。三吉様のほかに、村社の諏訪神社と山の神様、お不動様、観音様、地藏様、大師様などがあつた。

諏訪神社では4月下旬から5月初めに行う「千度参り」があつた。これは集落に火事が起きないように祈る火伏の祭りである。500個の豆を一粒ずつ手に取って鐘を鳴らして参拝しては神社の拝殿において、豆がなくなるまで500回繰り返して祈願する祭り行事だつた。終わったあとは各自持ち寄った酒と料理をいただく直会が賑やかに行われた。

山の神祭りは旧暦3月12日に行われた。この日は別当宅で当番が中心となって四升くらいの甘酒を作つた。味噌汁は大根と馬鈴薯にエリカ（イルカ）を入れた、いわゆるイルカ汁であつた。各戸持参した御馳走を食べながら甘酒や清酒を飲み全員で楽しんだ。

病送りは旧暦1月21日に行われた。各家では朝ご飯にとろろをかけて食べ、灸草（よもぎを干したもの）ととろろを紙に包んで戸口の上に下げた。また、団子を家の人の数だけ作りミズキにさして庭先に立てる。半紙に「病送り」と書いてそれで体を三回ふく。その半紙を茅の先に結んで玄関に立てた。太鼓の合図で家々から集まり出し、行列を作りながら太鼓を鳴らして村外れでそれを燃やした。太鼓を鳴らしながら「それいった」と手をたたき病を村外に送り出した。

ワラや正月松飾りを燃やす「おさいと」は1月15日に行った。

一方で、集落には「結い」の精神が生きていた。結束や助け合い、団結を重視する心の結びつきがあつた。それは具体的な日常生活に根づいていた。つまり、普段から葬式、稲刈り、雪おろし、祭り行事、養蚕などを維持していくための相互扶助的な協力関係が築かれていた。

## エ 佐竹与惣治氏所蔵「三吉大神」掛け軸

三吉神社祭礼日には佐竹氏が所蔵する掛け軸を持参していた。そこには次のような文字が記されていた。

羽前国西村山郡七軒村字田代 御分霊 太平山鎮座三吉大神 養蚕安全

これを見れば、『おらだの村』に記述されているように、秋田県の太平山に鎮座する三吉大神を田代に分霊したことが認められる。「養蚕安全」とあるように田代村では養蚕業の神として崇められていたこともわかる。集落では養蚕が盛んな時期に、農家の人々は繭玉の豊作を祈願する意味を込めて、年に2回ほどの三吉神社祭礼を欠かさなかった庶民信仰史が浮かんでくる。

なお、『おらだの村』には、三吉大神は「幸福を与え富を授ける神」として養蚕に限定されることなく広く信仰されてきた様子が記されている。

三吉神社祭礼は、田代集落の廃村翌年の昭和52年から平成22年まで34年間も毎年欠かすことなく続けられている。人々が離散してもなお、小高い山に登って小さな一つの祠にほうぼうから集まってくる。この現状をどう受けとめ何を汲み取るべきであろうか。

集落には三吉神社のほか、村社だった諏訪神社、さらに山の神様・お不動様・観音様・地藏様・大師様などがあり祭りは欠かさず行われていた。また病送り・おさいなどの村行事もあった。これらの多様な祭礼行事をとおして人々にはあつい信仰心が根づいたといえるかも知れない。

しかし、かつての守り神の一つ三吉神社の祭りとはいえ、離散した人々を34年間も繋ぎとめているものは信仰心ばかりではないだろう。人々の奥底にあるものは、おそらくかつての集落で生活を営んでいた頃に築かれた心の結びつきではなかろうか。それを育んだものが佐竹与惣治氏の語る言葉の中に見出される。すなわち「結い」といわれた労働上の共同作業や相互扶助体制である。

かつては田植え・稲刈り・養蚕・道普請・雪下ろし・葬式・祭礼行事など多くの村の人間がかかわって成立していた。村落生活ではこのような維持協力関係が普段の地域生活の中に当たり前のようであった。このような「結」精神の伝統が地域共同体を形成するもととなっていたと思われる。三吉神社祭礼に田代で暮した人々が今なお集まって来ることができるのも、このような良好な人間関係の基盤ができていたゆえではないかと考えられる。

土田茂範著『青苧と俳諧』は、「文化8年の書上帳でも、田代部落の全戸が本百姓であった。このような土台の上に商品作物が栽培されたのである。前にも記したように、青苧は十郎畑だけでなく、田代など、へき地といわれるこれらの地区をうるおしたのである。」と記している。青苧の高い経済性のもとで安定的な日常生活を送っていた田代地区であればこそ、良好な人間関係を築き上げることも可能だったのだろうと思われる。

## (4) 文芸を楽しむ

### ① 「前句寄」と集落のお祭り

旧七軒村の十郎畑地区に住んだ齋藤半助家は、青芋の集荷問屋として左沢地区に加賀屋という店を開き、山間の集落から集荷した青芋を左沢河岸から最上川舟運を利用して出羽国以外に広く販売して多大な収益をなしたことで知られる。齋藤家は明治初年頃に、2町歩を所有する近隣有数の地主となっていた（『大江町史 地誌編』）。齋藤家は明治時代後半以降には青芋需要の減少に代わって盛んとなる養蚕業でも産をなしていく。

齋藤半助家に代表されるように、旧七軒村一帯では農民は青芋生産・販売の収益によって一定の安定的経済生活を送ることができたものと考えられる。そのことを示す事例がある。十郎畑の氏神である熊野山神社には、慶応元年（1865）と慶応2年の2面の掛額が奉納されている。その板額には十郎畑の人々が詠んだ和歌形式の連歌が墨書されている（土田 1987）。村の日々のくらしや風景、心の内面を詠んだもので祈りと感謝を込めて熊野神に奉納したものである。村人たちは日々の労働作業の合間に連句の会を開いて楽しんでいた光景が浮かび上がる。

一方、旧七軒村田代地区は小清地区の枝郷として発達したもので、十郎畑より1 km 北に位置する。若い衆契約は十郎畑と一緒にあり、集落の繋がりは浅からぬものがあった。ここにも十郎畑と同じような文化的事例を見いだすことができる。すなわち、田代の鎮守諏訪神社に奉納された前句額の存在である。元治2年（慶応元年）の銘がみえるので十郎畑と同じ江戸末期のものである（土田 1987）。巻頭を含めば44句の和歌が連歌として詠まれている。いずれもが生活をおおらかに歌い上げている。そのなかで、とりわけ巻頭の直前に記された「高いひくいの分けへだてなく」という文字が目にとまる。歌を詠むにあたって村人の平等性を高らかに宣言しているようである。当時の村の絆の深さや結束力は想像を超えるものだったのではなかろうか。

十郎畑と田代の連歌額は、この時期に村人は歌心を持ち、すでにみづから文字を書き記すことができたことを示すものであり文学的素養の高さがほの見える。

少し時代はくだるが、この田代地区出身の結城登美男氏は『地元学からの出発』のなかで、昭和50年代頃の田代の様子について次のように述懐している。

山形県西村山郡大江町大字小清字田代。ここが私のふるさとである。標高450mの山あいには9軒の家があった。昭和30年代、60人ほどの人口であった。しかし、30数年前、村人は挙家離村、山を下りた。雪2m、田は少なく、林業すでに空しく、自給の作物とたばこなどの換金作物。金銭をモノサシにすれば貧乏村というのだろうか。この村の記憶はわたしにとって明るい。一所懸命に働いて、いつも笑顔があった。

これを記した結城氏に4年くらい前に田代の様子を直接うかがったことがある。離村して30数年も経つのに、今なお、かつての村人は毎年5月三吉様の祭りに集まっているのだという話を聞いて心底驚き感動した記憶がある。

さらに結城氏の『地元学からの出発』には、離村以前の連句の会について老人たちからの聞き書きが載せられているので一部を引用してみる。

季節の変わり目に行われた連句の会。あれはじつに楽しいものだった。その日は昼までに仕事を切り上げ、昼風呂をわかしてさっぱりして、男は紋付き、女は羽織に着替えて、村人全員、小さな神社に集まる。狭い境内にムシロを敷いて、車座になって句会が始まる。子どもたちはそのまわりをかこんで見物する。俺も小さい頃は早く句会の仲間になりたいと思ったもんだ。みんな荒れた武骨な手に紙と筆をもち、座主が出す「清々と」という上の句をうけて、下の句を考える。ややしばらくして、しわくちゃばあさんが「稲の穂の出る盆の月」とかえす。「うーん、なかなか」とうなずいた別のおとながまた続ける。「春過ぎて」とくれば、

白髪頭のじいさんが、「夏の浴衣を縫う娘」とまじめな顔で読み上げる。一座の目が、その色っぽい下の句に、ほおーっと声をあげて、あらためてじいさんの顔を見る。照れたじいさんが下を向いて酒をのむ。それはそれは楽しいもんじゃった……。

ここには、山間で暮らすことの意味や真の豊かさとは何か、という問いへの答えがひそんでいる。かつての青芋の村にこのような文化的生活が営まれていたことを銘記する必要がある。

なお、十郎畑や田代などのように村人が連句を楽しんだ痕跡をみることができる同類の事例は、中沢口山神社掛額（慶応元年）、道海四所大明神掛額（天保12年）と地蔵尊掛額（文久元年）、黒森八幡宮掛額（慶応元年）、貫見熊野神社掛額（明治26年）など多数がみられる。

以上にみるように、青芋は山間部の村人たちが本百姓にもなり得た商品作物であり一定の経済的豊かさのなかで精神的・文化的豊かさをもたらしたものと考えられる。青芋は山間の集落の自立した生活と文化を創出したといえよう。なお、十郎畑は昭和51年に全戸離村して今は廃絶している。

以下で、社寺に残されている「前句寄」（前句付）の掛額と、現在も行われている三吉神社祭礼の調査結果を報告する。

## ② 寺社の掛額調査

### ア 「田代諏訪神社奉納前句額」

諏訪神社は元来田代地区の鎮守であったが、廃村により昭和55年に移築した。なお、田代諏訪神社の由来については、「③三吉神社祭礼調査と旧田代集落概況」で述べている。調査は2010年8月4日、小清地区区長佐竹一郎氏、諏訪神社総代佐竹勝蔵氏立会いのもと実施。[所在地] 小清地区

[掛額状況] ・年号：元治2年（1865）3月19日 ・法量：よこ152,5 cm、46,5 cm  
 ・作者：33名（十郎畑4名特定） ・句数：46句  
 ・評者：周玉（朝日町中沢地区、かつては左沢領内）

#### [関連状況]

板面には胡粉を下塗りし額縁は黒塗りをほどこした品格ある掛額である。さらに優秀作品である「巻頭」と「巻軸」のそれぞれの前二箇所、および最後尾の「龍泉堂筆」に朱印（落款）を押して由緒正しきを示している。額の裏面には「佐竹六佐衛門秀光 三十六歳ニテ書之」と記されている。「佐竹六佐衛門秀光」なる人物は、正面最後尾にある「龍泉堂」と同一人物であり小清地区にある佐竹家先祖にあたる（『大江町の絵馬四』『青芋と俳諧』）。

### イ 「十郎畑熊野山掛額」2面

熊野神社は元来十郎畑の鎮守であったが廃村により解体された。調査は2010年8月4日、小清地区区長佐竹一郎氏、諏訪神社総代佐竹勝蔵氏立会いのもと実施。[所在地] 小清地区

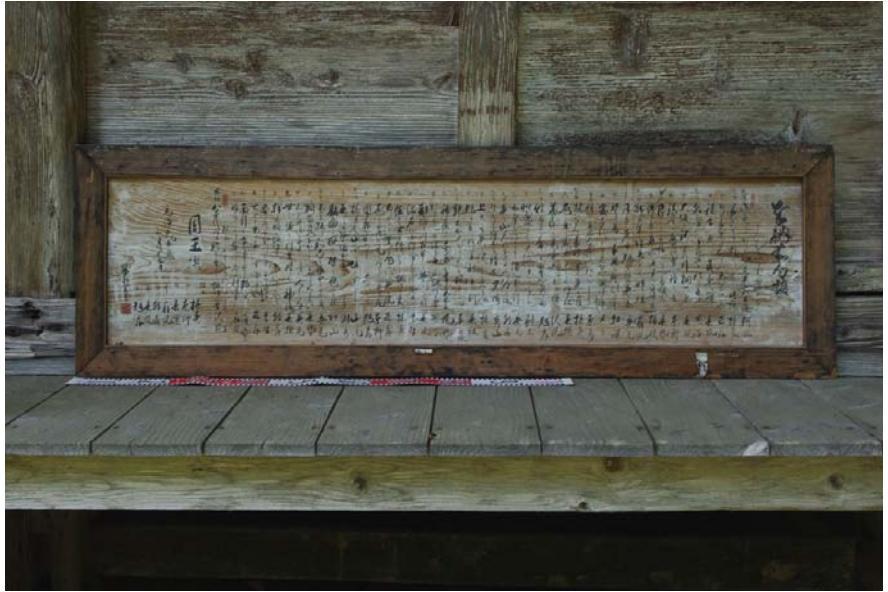
#### a その1「奉納熊野山」

[掛額状況] ・年号：慶応元年（1865）4月8日 ・法量：よこ164 cm、42,3 cm  
 ・作者：26名（十郎畑6名、道海3名、大暮山1名、貫見1名 計11名特定）  
 ・句数：40句 ・評者：周玉

#### [関連状況]

「巻頭」前に朱印と最後尾の「龍泉堂書」に朱印（落款）があり、田代諏訪神社前句額と同様に格式のある額となっている。





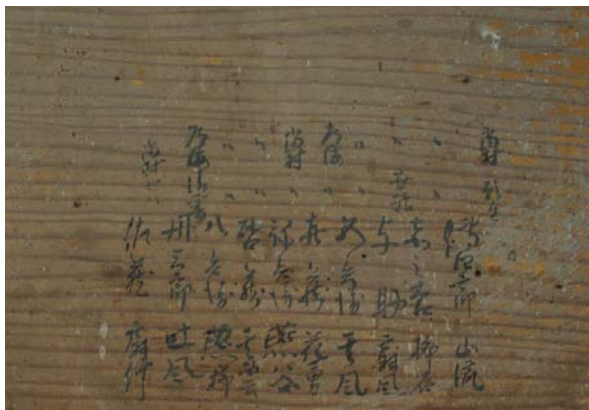
「田代諏訪神社奉納掛額」



「奉納熊野山」



「熊野山奉納掛額」



「熊野山奉納掛額」裏面



田代諏訪神社

## b その2「熊野山奉納掛額」

- [掛額状況] ・年号：慶応2年（1866）4月吉辰 ・法量：よこ 163,7 c m、42,2 c m  
 ・作者：24名（十郎畑8名、道海3名、大暮山1名 計12名特定）  
 ・句数：42句 ・評者：右瀬芳亭花暁

## [関連状況]

裏面には願主2名、世話6名、清書1名、セワ1名の計10名が記されている。いずれも居住する村名と本名、俳号が併記されていることから、十郎畑居住者は8名で、それ以外は道海2名であることが知られる。

## ウ「中沢口山神奉納掛額」

調査は2010年8月2日、神社所有者 庄司幸一氏立会いのもと実施。[所在地] 大字沢口字中沢口大里神社

- [掛額状況] ・年号：慶応元年（1865）7月3日 ・法量：よこ 181 c m、たて 79 c m  
 ・作者：15名（谷沢1名・貫見1名・道海2名・大暮山1名 計5名特定）  
 ・句数：102句 ・評者：前半は周谷、後半は周玉（朝日町大谷中沢）

## [関連状況]

境内に「甲子供養塔」（文久四年三月大吉日）がある。高さ77 c m、よこ68 c m。

『大江町の絵馬四』によれば、山神社に「山神奉納前句寄」（文化七年四月吉日）があり、その中の作者は樽水、赤沢口、中沢口、黒森、貫見、さらに旧七軒村の人々が多く見られる。

## エ「道海地藏尊奉納掛額」

2010年8月2日に調査を実施。[所在地] 道海地区四所明神（入口正面）

- [掛額状況] ・年号：文久元年（1861）4月3日  
 ・法量：よこ 139 c m、たて 30,5 c m（『大江町の絵馬四』）  
 ・作者：16名（道海5名特定） ・句数：46句  
 ・評者：前半は花暁、後半は梅周（稲沢地区）

## [関連状況]

『大江町の絵馬四』によれば、四所明神の中には奉納掛額が二面ある。その一つ「天保十二年四月三日」のものは、作者17名（俳号）、句数は52句ある。作者には旧七軒村の地名をそのまま記したものが多い。

もう一つは、同じく「天保十二年四月三日」の年号のものであり、作者17名、句数42句ある。道海・小清だけ多く、やはり旧七軒村の地名を名乗った人が多い。

## オ「黒森八幡宮奉納掛額」

調査は2010年8月3日、松田庄一郎氏立会いのもと実施。[所在地] 黒森地区

- [掛額状況] ・年号：慶応元年（1865）8月15日 ・法量：よこ 189,5 c m、たて 76,3 c m  
 ・作者：21名（貫見1名・道海3名・十郎畑2名 計6名特定）  
 ・句数：114句 ・評者：前半は晴雲亭周玉、後半は梅園亭周谷

## [関連状況]

114句の中に「絹糸や青苧もともにうりきらす 春霞」というものが見られるが、これはまさしく当地方の特産品で青苧と養蚕による絹の隆盛をうかがわせる句として注目される。

八幡宮拜殿には小型のお社が鎮座しているが、そこには青苧で作られた戸帳がかけられている。青緑色で蚊帳地の可能性もある。近くには青苧糸も散見された。

カ「<sup>ゆうくつざん</sup>熊窟山善法寺掛額」

調査は2010年8月3日、熊窟山善法寺住職 駒林良仁氏立会いのもと実施。[所在地] 小見地区

- [掛額状況]
- ・年号：慶応4年(1871)小春
  - ・法量：よこ45cm、たて182.5cm(『大江町の絵馬六』)
  - ・作者：14名(小見3名特定)
  - ・句数：50句
  - ・評者：前半は晴雲齋周玉、後半は樹園亭周谷



「中沢口山神奉納掛額」



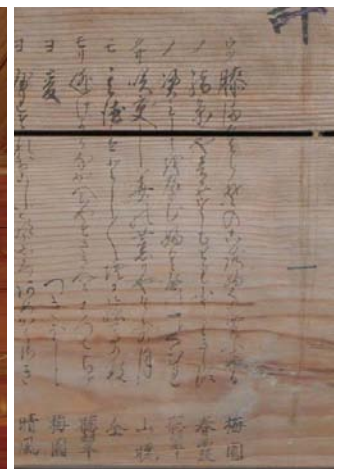
中沢口大里神社



「道海地藏尊奉納掛額」



道海四所大明神



(青苧と生糸を詠んだ唄)

「黒森八幡宮奉納掛額」

## キ「藤田若宮八幡神社奉納掛額」

2010年8月3日調査実施。[所在地] 藤田地区

- [掛額状況] ・年号：明治11年(1878)3月15日 ・法量：よこ187.5cm、たて50.5cm  
 ・作者：22名(大暮山2名・小清2名・小見3名 計7名特定)  
 ・句数：62句  
 ・評者：前半は晴雲齋周玉、後半は聴松齋一夕(山形出身)。

ク「<sup>にしはら</sup>西原稻荷神社奉納掛額」

調査は2010年8月3日に実施 [所在地] 藤田地区(元来は藤田字西原地区の西原稻荷神社に奉納したもの)

- [掛額状況] ・年号：明治15年(1882)1月10日 ・法量：よこ188.5cm、たて46.5cm  
 ・作者：16名(藤田6名特定) ・句数：84句  
 ・評者：前半は晴霞齋周玉、後半は聴松齋一夕

## ケ「伏熊護真寺阿弥陀堂奉納掛額」2面

## a その1「奉納前句謎」額

2010年8月3日調査を実施。[所在地] 伏熊地区

- [掛額状況] ・年号：天保13年(1842)3月15日 ・法量：よこ148cm、たて53.8cm  
 ・作者：9名(大暮山1名特定、その他世話人の「和水」「如石」は地元民か)  
 ・句数：33句 ・評者：一夕

## b その2「奉納謎」額

2010年8月3日調査を実施。[所在地] 伏熊地区

- [掛額状況] ・年号：弘化5年(1848)3月15日 ・法量：よこ147cm、たて36.4cm  
 ・作者：記名なし(世話人「如竹」「花星」「花遊」「金玉」「花月」は地元民か)  
 ・句数：22句 ・評者：松月(大暮山)

## コ「小清清光院寺新宅掛額」

2010年8月4日調査を実施。[所在地] 小清地区

- [掛額状況] ・年号：明治13年(1880)小春  
 ・法量：たて180cm、よこ36cm(『大江町の絵馬七』)  
 ・作者：15名(催主の梅立、世話人の鳳声、栄竹、栄月、旭水は地元民か)  
 ・句数：79句 ・評者：周玉、一暁(貫見)、周谷

## [関連状況]

真言宗清光院は山形宝幢寺の末寺で旧田代地区の諏訪神社の別当寺だった。この清光院の改築祝いに奉納したものといわれる。『大江町の絵馬七』では、評者の一人である一暁は「貫見熊野神社の俳額の催主の一人であり、俳句も延べ47句中9句も出しているので貫見の人と考えられる。」と記している。

## サ「奉納白山宮」額

2010年8月4日に調査を実施。[所在地] 大久保(地区)

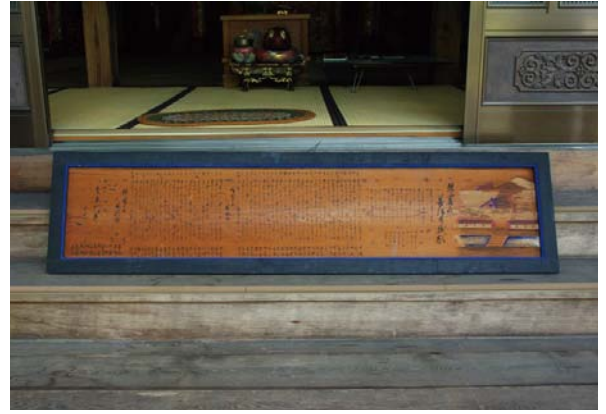
- [掛額状況] ・年号：慶応4年(1868)吉祥日

## [関連状況]

白山神社入り口正面上部に掛額があり、「羽州村山郡小清村 催施主 薫光 セハ人 其松(ほか略)」とある。



黒森八幡神社（青芋の糸）



「熊窟山善法寺奉納掛額」



「藤田若宮八幡神社奉納掛額」



「西原稻荷神社奉納掛額」



「奉納前句名謎」



「奉納謎」



「小清清光院寺新宅掛額」



「奉納白山宮」額

## シ その他の調査

「貫見熊野神社前句謎集掛額」(明治26年)1面

「沢口御嶽神社奉額」(文化6年のもの1面 両面に記載、明治9年のもの1面、計2面)

以上の掛額3面を求めて調査したが、熊野神社と御嶽神社には存在しなかった。

沢口御嶽神社の掛額は最上定次郎氏(以前別当家)が所蔵者であることがわかった。沢口御嶽神社の文化6年銘1面については、『大江町の絵馬七』に紹介と解説が掲載されている。以上、この3面はまだ実見していない。

## ③ 前句寄の担い手たち

## ア 左沢の俳諧活動

左沢の称念寺境内に安永3年(1774)銘の「芭蕉墓」(自然石)がある。建立者は刻まれていないが、「左沢連」とあるので左沢在住の俳人たちによって建てられたものと考えられる。『大江町史』では「大庄屋・医師・住僧を含む左沢の俳人、特に美濃派小林風五の門流に連なる俳人が多くいたことが察せられる。」と記している。

左沢の江戸時代末期の俳諧を代表するものとして、しばしば富沢地区の大沢寺の嘉永4年(1851)の俳額がとりあげられる。そこには地元左沢のみならず寒河江、谷地の俳人たちも名を連ねているが、とりわけ美濃派に属するとみられる谷地の緑峰が主要な役割を果たしたとされている。また、句集『水蛙集』なども残されている。

## イ 前句寄の取り組み

さてこのような左沢の俳諧活動に対して、一方では「前句寄」と呼ばれるもう一つの文芸的取り組みに注目しなければならない。じつは、大江町の掛額にみられる多くの句はほとんど「前句寄」である。前句寄とは「前句付」ともいわれているが、その基本型は俳諧師(宗匠)によってあらかじめ出題された七・七の前句に対して、俳諧や文芸をたしなむ人々がそれぞれ五・七・五の付句をつけて一定の句を完成させるものである。例えば著名な例として、「切りたくもあり、切りたくもなし」という前句の出題に対して、「盗人を捕らえてみれば我が子なり」という付句を加えたものがある。

なお、五・七・五の前句の出題に対しては七・七の付句、さらに五の前句に対しては七・五の付句があるなど、様々な組み合わせを楽しむことができる。

このような前句寄は、表現や内容に俳諧のような厳しいきまりがなかったために、江戸時代の元禄期(1688～1704)の頃から広く一般庶民に親しまれ、しだいに農村社会にまで浸透した。ちなみに川柳はのちに前句寄から独立したものである。

前句寄は文化・文政期(1804～30)頃に現在の村山地方で盛んになったといわれ、その中心地は元禄期に芭蕉が訪問した尾花沢であり、そこは俳人鈴木清風が活躍した土地でもあった。文政12年(1829)に大類千柳がまとめた前句集である『古吟集壺万句寄』はそれを象徴しており、作者たちは尾花沢はもちろん、大石田、楯岡、谷地、長瀬、天童、左沢、寒河江の各地域に広がっており、句数も1,563句と多く、往時の盛況ぶりがうかがわれる。なお、この『古吟集壺万句寄』の中には「左沢会」の名もあり、俳号はないが9句が詠われている。

前句寄の作者居住地は、一般的には最上川舟運が発達した流域の町場が多かった。舟運の河岸があった流域地域などは経済的恩恵を受けるとともに、外来文化をいち早く見聞でき文化的触発の機会が比較的多かったといえよう。物心のゆとりが生まれる中に、前句寄など句を詠む文芸的素養が育まれたものと考えられる。

なお、前句寄は、伝統的・正統的な俳諧に比べてより大衆化して「雑俳」とよばれたが、そこには庶民の日常の暮らしのなかからにじみ出た喜怒哀楽や農民なりの思考や風刺、滑稽などもあり、庶民資料としても貴重

なものといえよう（『最上川と羽州浜街道』）。

#### ウ 江戸期の掛額

山形県立博物館が発行した『山形県の絵馬―所蔵目録』では、「前句寄」を主とした掛額 24 面が明らかにされている。その中で江戸期の年号が入った掛額は 19 面が確認できる。その他 5 面は明治時代以降に詠まれたものである。特に江戸時代のものの内訳を次に示す。

- ・道海 天保 12 年（1841）2 面、文久元年（1861）1 面
- ・中沢口 文化 7 年（1810）1 面、慶応元年（1865）1 面
- ・沢口 文化 6 年（1809）2 面
- ・十郎畑 慶応元年（1865）1 面、慶応 2 年（1866）1 面
- ・田代 元治 2 年（1865）1 面
- ・黒森 慶応元年（1865）1 面
- ・月布 元治 2 年（1865）1 面
- ・大久保 慶応 4 年（1868）1 面
- ・小鉾 天保 3 年（1832）1 面
- ・小見 慶応 4 年（1868）1 面
- ・伏熊 天保 13 年（1842）1 面、弘化 5 年（1848）1 面
- ・富沢 嘉永 4 年（1851）1 面
- ・用 享和 3 年（1803）1 面
- ・左沢 慶応元年（1865）1 面

以上、前句寄は大江町において少なくとも江戸時代後期以降は随分盛んに行われたことがわかる。とりわけ山間部の村々にまで掛額が見出されることは大いに注目される。前述したように句会は主として最上川流域の町場に比較的多く開催されているのであるが、大江町の場合は山間部の村々に句会が催されたことがこの掛額の所在調査によって浮かび上がってくる。それは次の前句寄の作者たちの居住地からも指摘できる。

#### エ 前句寄作者の居住地

これらの掛額の前句寄作者たちの中で、はたして大江町内に居住地を持つ人がどのくらいいたのであろうか。そこで本年度の実地調査および『大江町の絵馬四』～『同絵馬七』を参照して検出してみた結果、大江町内居住の作者は 25 名が特定できた。その居住地と俳号を次に記してみる。

- ・十郎畑…山流、柳石、扇風、其風、燕谷、其雲、燕柳、扇竹（8 名）
- ・藤 田…梅霞、寿月、篁風、玉泉、竹霞、晴月（6 名）
- ・道 海…花勇、窓月、吐風、霞晴（4 名）
- ・小 見…竹露、暁庵、川柳（3 名）
- ・小 清…峯玉、慈光（2 名）
- ・貫 見…鶯声（1 名）
- ・沢 口…岷山（1 名）

ここでは十郎畑居住者が最も多く特定されている。十郎畑とは昭和 51 年に廃村となった集落である。かつては優良青苧を産出した土地であり、斎藤半助家という青苧商人が活躍した。そのことについては後段で述べることにする。

上記の作者たち以外に、現朝日町に居住する作者は、大暮山の松月、竹山、義山の3名が特定できる。なお、評者としてしばしば登場するのが、現朝日町中沢（かつては左沢領内）の周玉と寒河江市谷沢の周谷である。小清の龍泉堂は十郎畑奉納熊野山掛額の筆者（清書）を務めており、一定の識者とみることができるだろう。

上記26名以外の作者については、今のところ特定はなかなか困難であるが、『大江町の絵馬四』の中の「一、道海 四所大明神 奉納掛額 その一」の解説文では、「作者に旧七軒地名をとった名が多く見える」とある。また、「四所明神 奉納掛額 その二」でも、「作者は別額と同様の人々であるが、道海・小清だけ多く、旧七軒村の地名を名乗った人が多く見られる。」と記している。同じく、「三、中沢口 山神奉納前句寄・掛額」の解説では「作者の樽水・沢口・中沢口・黒森・貫見と旧七軒地区の人々が多く見られる。」とある。このように、作者の居住地特定は難しいものの、状況判断から現大江町内に在住した人々が多数含まれることが推定されるのである。

同じように、すでに前述した十郎畑の「熊野山奉納掛額」（慶応2年）の作者24名中、特定できるのは十郎畑8名、道海3名、大暮山1名の計12名であった。その他12名は不明であるものの、そこに十郎畑や近くの田代の人々が多く含まれていることが考えられる。

結城登美男著『地元学からの出発』には、かつて田代地区の諏訪神社で行われた「連句の会」の様子を古老から聞き取りした内容が生き生きと描かれている。そこでは田代の少なからぬ農家の人々が句会に参加して楽しんでいたことを知ることができる。掛額が奉納された江戸末期とは時代的にかけ離れているが、このような句を詠んで楽しみ喜び合う会が集落によって綿々と続けられてきたことは明らかである。

『大江町史』では、「前句寄の仲間が主に山村部に大きい勢力を占めていた。」「平易と滑稽を追求したところに妙味が表れている。むしろ厳格な俳諧よりも人情に触れた点が多く、従って山村に根強く継承された。」と記している。また、『大江町の絵馬五』のなかの「五、藤田若宮八幡神社奉納掛額」の解説には次のように記されている。

催主の世話に当たった人々は小見の竹霞・暁庵・川柳で、いわば農山村に当たる。これらの村々隅々まで前句寄の仲間が存在したことは文芸の浸透という点から見て驚嘆に値する。

この解説文は明治11年（1878）の前句寄に対するものであるが、前記掛額調査のとおり江戸時代の前句寄も農山村部に伝播していることが明確に認められることから、たしかに「文芸の浸透」には時代的古さと地域的広がりがあったといえよう。よって「驚嘆に値する」とはあながち大袈裟なことではない。



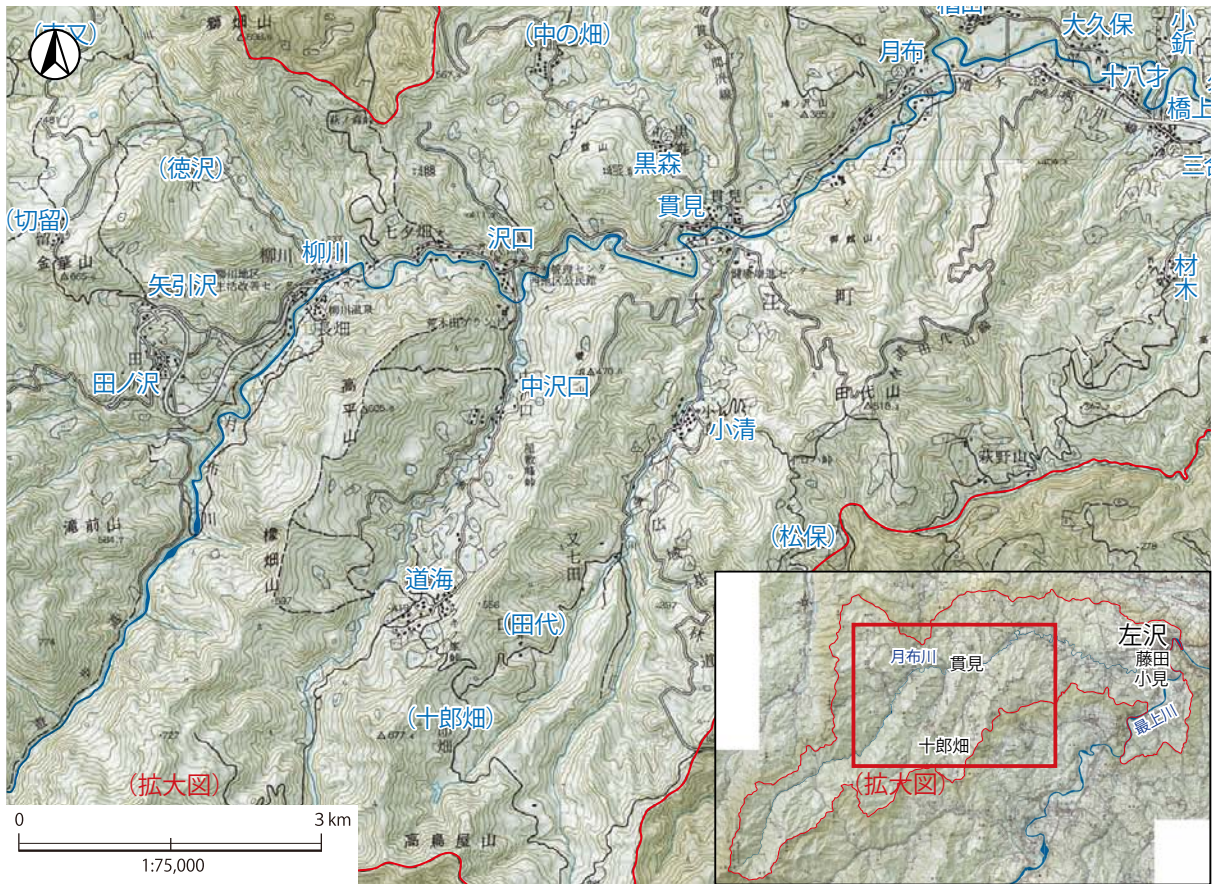


図6-23 「前句寄」の額と作者の分布地

#### ④ 前句寄と山間集落の生活

本稿でまず注目すべきは、前句寄を記した掛額が山間集落に多く見出されることである。しかも古いものは江戸時代後期までさかのぼる。山間集落の人々は日々の農作業の合間をぬって鎮守の神社に集まり、そこで日常を語りつつ句作を楽しんだであろう光景が想像されるのである。それは、百姓に教養や学問は無用という風潮が支配的だった長い間の歴史を覆すものですらある。

前掲『青苧と俳諧』を編んだ土田茂範氏は、十郎畑の熊野神社に掲げられた「熊野山奉納掛額」（慶応2年）について、「この掛額を見て、わたしが驚いたのは8軒の当主がみんな文字を読めたということであった。長い間、百姓は文盲であったと教えられ、その通りだと信じてきたわたしにとって、これは青天のへきれきであった。そして、目からウロコが落ちたような思いであった。」と記している。

こうして、前句寄掛額をつうじて明瞭となる江戸時代後期以降の山間集落の人々の暮らしの姿とは、おおよそ次のようなものではなからうか。

- 1 文字の読み書きが可能であった。
- 2 文芸的素養や教養が一定程度獲得されていた。
- 3 句を詠もうとするモチベーション、文芸的趣味に興じるゆとりを保持していた。
- 4 上記のことがらを保証しうる安定的経済生活が営まれた。

これらのことにさらに付け加えるならば、句会を催すことができる日常的基盤として、リーダーのもとでの集落のまとまり・結びつきということも指摘できる。先にみたように、かつて田代地区に居住した人々が、離散した今も年1度に三吉神社祭礼に集合することができる背景・要因の一つは、そのあたりに求められるのではないかと思われる。

4の「安定的経済生活」とは、いうまでもなく青苧がもたらす経済的うるおいである。明治時代に奉納された前句寄掛額は貫見地区熊野神社にある明治26年が最後である。その次に奉納されるのは昭和10年になってからであり、それは前句寄ではなく連歌・俳句の掛額であった。青苧は明治30年代に入ってから次第に商品作物としての首位の座を養蚕に奪われていく過程がある。しかし、養蚕は各地方で生産され青苧ほどの高い現金収入はもたらさなかったといえる。この青苧の衰退期と前句寄の奉納が途絶える時期はほぼ一致しているといえまいか。もしそうであれば、山間集落の前句寄奉納は青苧がもたらす高い経済性と共にあったと言える一つの根拠ともなる。